（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	静岡県	番号	２２

推進地区名	協力校名	児童生徒数
伊豆市	伊豆市立修善寺小学校	117
湖西市	湖西市立新居小学校	830

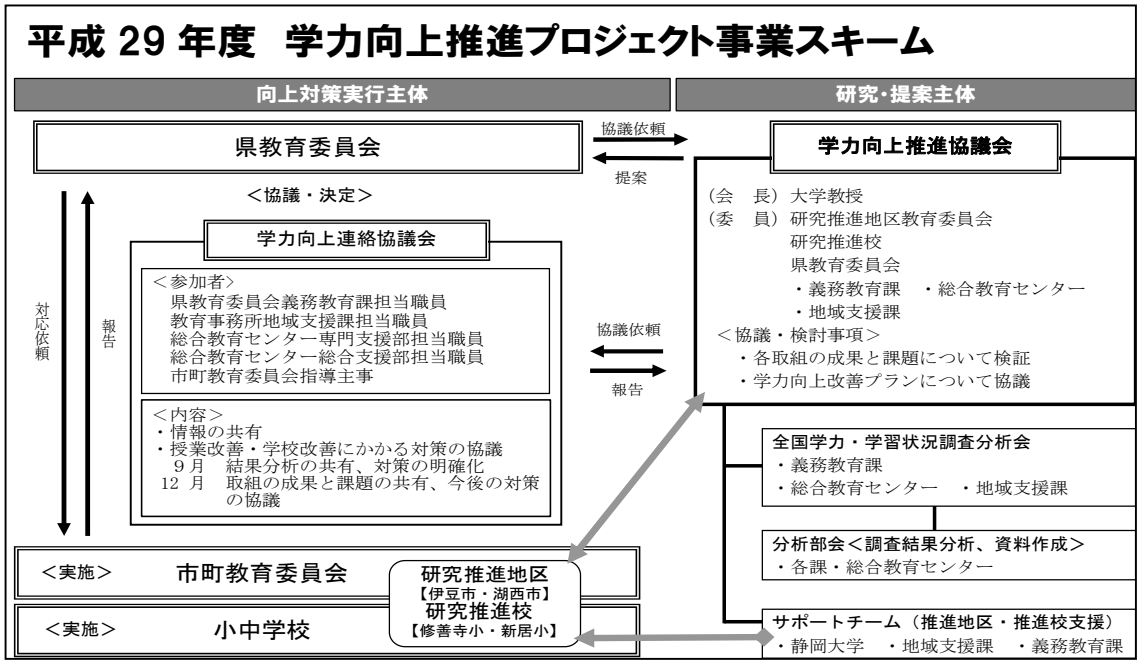
○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

「学力向上推進プロジェクト事業」を中核に実践研究を進めた。

(1) 学力向上推進プロジェクト事業

全国学力・学習状況調査の問題や結果を受け、静岡県児童生徒の学力向上のため、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや研究協力校による実践研究を通して具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発する。



ア　静岡県学力向上推進協議会の設置（年３回）

推進地域、推進地区、協力校の課題を踏まえた上で、重点課題を解決するための手だてを吟味し、推進校、推進地区の実践を通して成果について検証し、改善モデルを示した。

イ　推進地区、協力校へのサポートチーム派遣

推進地区、協力校の課題解決へ向けて、効果的なサポートができるようにサポートチームを編成し、派遣した。

ウ　全国学力・学習状況調査分析会の実施

総合教育センター小中学校支援課、各教育事務所地域支援課、義務教育課が連携し、調査問題や調査結果の分析を行った。

エ　学力向上連絡協議会の実施（年２回）

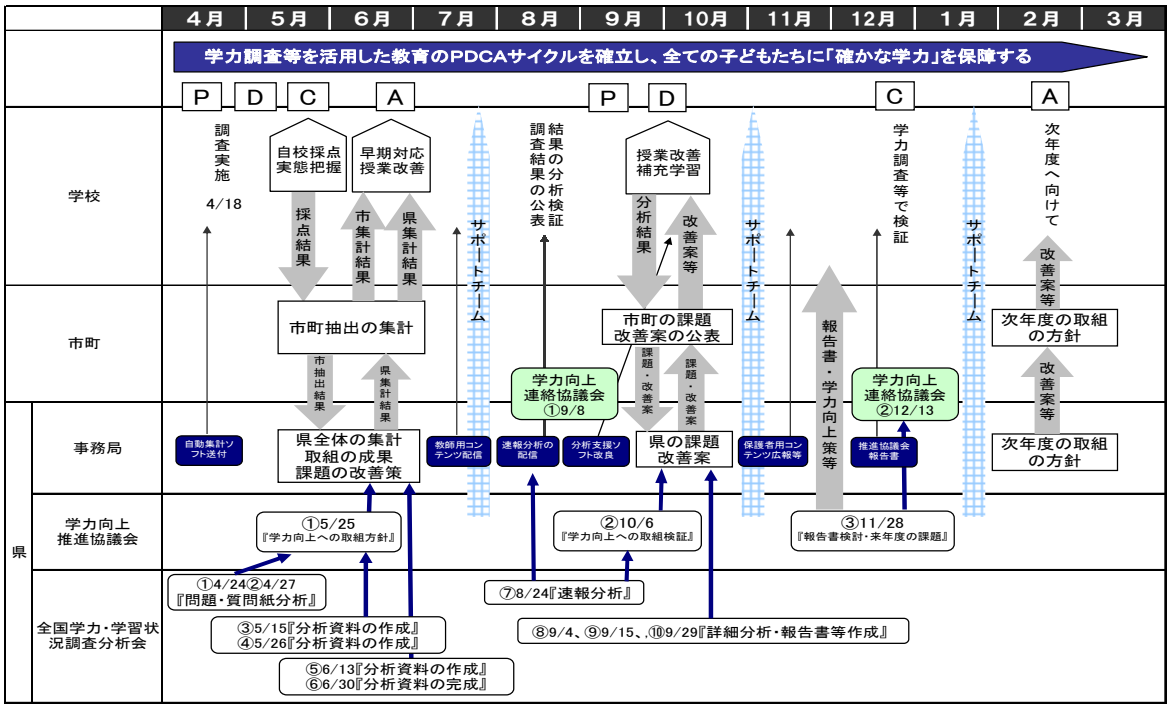
県と市町教育委員会学力担当指導主事が一堂に会し、本県の学力に関する実態や対応策について協議する場を設定し、県と市町教育委員会が協力して学校支援を行った。

オ　全国学力・学習状況調査分析支援ソフトの改善と配信

全国学力・学習状況調査結果から自校及び、個々の児童生徒の学力・学習状況を把握・分析し、学校における児童生徒への教育指導の成果や課題を学校改善や授業改善に生かすことを目的に、文部科学省から送付されるデータに合わせて、自校の調査結果を詳細に分析できるソフトを改善し、各学校で活用できる環境を整えた。

カ　全国学力・学習状況調査を活用したＰＤＣＡフォローアップシステムの構築

平成29年度 学力調査等を活用した『ＰＤＣＡ』改善サイクル



２．推進地区における取組

(1)　伊豆市の取組

ア　全国学力・学習状況調査、および標準学力調査（CRT）の活用

(ｱ) 全国学力・学習状況調査について、自己採点による結果分析と課題把握を促すとともに、県の早期対応への取組に対して積極的なデータ提出を依頼した。また、標準学力調査（CRT）については、学校単位で実施した。

(ｲ) 全国学力・学習状況調査における伊豆市の調査結果の分析と考察、および授業改善の視点をまとめ、各校に配付した。各校の取組状況の把握に努めた。県の分析支援ソフトを活用し、自校の課題を多面的に分析し、学校改善・授業改善に生かすよう指導した。

イ　伊豆市教育センター各種研修会や市教育研修会の充実

(ｱ) 伊豆市教育センターの各種研修会において、早期対応の結果をもとにした分析と考察、および授業改善の視点について周知した。

(ｲ) 教職員の授業力向上を目標に、今年度から各校の研修テーマを「自ら学習に向かい、学び合いを通して、力が付く授業づくり」に統一した。市共通のテーマを設定することで、各校における研修の充実を図った。

(ｳ) ７月の夏季研修会では、静岡大学教職大学院教授の原田唯司氏を招聘し、「特別な支援を必要とする子どもの見立てと対応」と題して講演会を開催した。

(ｴ) 11 月には協力校による研究発表会を開催し、２年間の取組の成果について伊豆地域の学校を中心に広く発信した。

ウ　市内全小中学校への指導主事派遣

(ｱ) 全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、各校における授業改善のためのＰＤＣＡサイクルの土台づくりを推進するべく、担当指導主事が各校を訪問し、授業改善と学力向上に向けた取組について指導・助言を行った。

(ｲ) 協力校の要請に応じて担当指導主事を派遣し、授業改善と校内研修の充実を図った。

エ　伊豆市教育センター教育課程委員会の活用

(ｱ) 第１回委員会（５/15）において、自校採点による結果分析と合わせて「今、求められている学力」の把握に努めるよう助言した。

(ｲ) 第２回委員会（12/４）において、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、伊豆市における児童生徒の抱える課題について伝達した。

オ　全国学力・学習状況調査結果の公表

(ｱ) 全国学力・学習状況調査の結果に基づき、学習活動の充実と学力のさらなる向上を図るため、保護者向け啓発リーフレットを作成し、市内児童生徒の全家庭に配付した。

(ｲ) 保護者向け啓発リーフレットは、市内全保育園・こども園に掲示を依頼し、学校教育に対する理解を図るとともに、就学に向けた意識の啓発を図った。

(2) 湖西市の取組

ア　学力・学習状況・生活習慣について把握し分析する

学力についての現状を把握して分析するために、全国学力・学習状況調査後、「湖西市版早期対応」に取り組んだ。「早期対応」から明らかになった課題と改善策を今年度の結果と照らし合わせ、さらに具体的方策を考えて授業改善に活かした。

また、湖西市学力向上検討会を実施し、各校主幹教諭・教務主任に向けて静岡県学力向上推進協議会の内容伝達や全国学力・学習状況調査の湖西市全体の分析結果について伝達した。

イ　授業改善に向けての学校支援

市教育委員会の学校訪問時に指導主事が研修主任と面談して研修推進における状況を随時確認し、校内研修の進め方について助言した。また、研修指導員が市内小中学校からの要請を受け、授業づくり・指導案作成において関係職員とともに検討を行うなど、授業改善に向けて具体的なサポートをした。

ウ　市内小中学校の連携を深め、授業力を高め合う

(ｱ) 協力校（新居小学校）への支援

県教育委員会サポートチーム派遣事業を活用し、静西教育事務所の指導主事による指導を依頼した。協力校での研究授業を参観し、その授業での付けたい力と単元構想の相関性を視点として、授業づくりへの指導・助言をいただいた。県教育委員会義務教育課の指導主事からは、資質・能力の育成についても指導

いただき、教科等横断的な視点を大切にした授業構想がなぜ必要なのかについて講話をしていただいた。

また、市教育委員会指導主事と研修指導員が協力校の授業を定期的に参観し、事後の研究協議のなかで授業の視点に照らして助言をした。さらに、学校から要請を受け、授業者や当該学年職員とともに単元構想について考えるなど、学習指導案の検討をした。

(ｲ) 湖西市学力向上検討会

計２回開催し、静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容について伝達をしたり、静西教育事務所の指導主事を講師に招聘し、学校訪問により把握した校内研修の実態をもとに授業改善に向けての指導・助言を得た。

エ　学力向上の基礎づくりを家庭とともに推進する

「学びの基礎　７つの取り組み」の資料を、各家庭に配布。学力向上の基盤となる生活習慣の大切さを保護者に伝え啓発をした。

オ　全国学力・学習状況調査結果の公表

(ｱ) 全国学力・学習状況調査の結果に基づき、学習活動の充実と学力のさらなる向上を図るため、保護者向け啓発リーフレットを作成し、市内児童生徒の全家庭に配付した。

(ｲ) 保護者向け啓発リーフレットは、市内全保育園・こども園に掲示を依頼し、学校教育に対する理解を図るとともに、就学に向けた意識の啓発を図った。

３．協力校における取組

(1) 伊豆市立修善寺小学校の取組

ア　わかる授業をめざす授業改善

わかる授業を、友だちと関わり合い、自分の考えを広めたり深めたりしながら、理解を深めていく授業と考え、「学習形態の工夫」「伝えるための工夫」「発問・支援の工夫」という３つの工夫を授業に取り入れて実践を積み重ねた。

イ　つけたい力を明確にした継続的な取組

本校の児童に欠けている力、つけたい力を明確にして、それらの向上・定着を目指した。学びに向かう基本的な姿勢の定着、向上や基礎的な知識・技能の習得に向け、全校同一歩調で、継続して取り組んだ。

ウ　学び合いが生きる集団づくり

本校の児童の課題をとらえ、自己の心を成長させ、安心して発言できる学級集団や学習環境を築いていく力、それらも学びを支える基盤となる力と考え、個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を築けるよう取組を継続している。

エ　個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組

子どもたちの心の成長を促し、安心して発言できる学級集団を築いていくことが学びを深めていく基礎であると考え、個々の意欲の向上や心の成長を促し、よりよい人間関係を育む取組を継続的に行った。

(2) 湖西市立新居小学校の取組

ア　国語科における一層の授業改善への取組

平成 28 年度から取り組んでいる「単元デザインシート」を学年で作成しながら授業改善を進めた。

イ　国語科を核とした教科等横断的な授業づくりへの取組

国語科で身に付けた力が国語科の授業内で完結することなく、他教科の中で発揮されてこそ国語科の授業改善がなされるという押さえのもと、国語科の授業改善

をベースに、国語科と他教科・領域とを横断させた授業に取り組んだ。

ウ　授業を支えるものへの取組

「漢字チャレンジ」への取組や朝読書の時間を教育課程に位置づける等、授業以外の時間でも学力定着に関わる取組を行った。

エ　家庭学習の充実

家庭学習の目的や具体的な方法を文書にまとめ保護者に配布するとともに、PTA 総会や懇談会等において紹介した。また、学年便りやホームページ等にも掲載し、各学年の学習の様子を伝えた。

オ　研究発表会の開催

平成 28 年度からの研究の成果として、平成 29 年 11 月 14 日（火）の午後に、各学年１学級ずつ計６学級の授業公開とその分科会を中心とした研究発表会を開催した。国語科の授業と、国語科と他教科・領域を横断させた授業を公開した。

○　実践研究の成果

１．協力校における取組の成果

(1) 伊豆市立修善寺小学校の成果

ア　わかる授業をめざす授業改善

授業改善の手だてを共通理解し、実践を積み重ねるとともに、授業研究を推進してきたことで、先生方の授業への意識が変わり、授業力の向上も感じられ、「友達と話し合いながら学ぶと授業がわかりやすい」と思う児童の割合が増えた。学び合いを通して課題を解決していく力が伸びている。

国語科では、授業の内容がわかると答える児童の割合が増えた。算数科についても、授業の内容がわからないという子の割合が減っていることから、「わかる授業」へと改善が進んだと考えられる。保護者との連携も進んでいる。

イ　つけたい力を明確にした継続的な取組

取組により、子どもの話す力・聞く力の向上が見られ、すすんで自分の考えを話し、関わり合う姿が多く見られるようになった。また、家庭学習や学習の約束への取組など、学習に向かう基本的な姿勢も向上した。

ウ　学び合いが生きる集団づくり

意欲の向上や心の成長が見られるようになった。人間関係や学級集団がよりよい方向に向かい、学習環境が整い、楽しく学校生活を送ることができる子の割合も増えてきた。

エ　学力調査等より

国語では、全体・基礎・活用ともに、全国の正答率との差が縮まったり、全国の正答率を上回る学年もあったりと向上がみられた。算数では、全国平均には及ばないまでも、差が縮まり向上が見られた学年も多い。

算数での話合いを中心とした言語活動が、国語の力の向上にも影響してることがうかがえる。

(2) 湖西市立新居小学校の成果

ア　児童の学力について

この２年間､全てにおいて県平均を上回っている｡国語 B 問題は全国比+5.5 ポイントとなっており、知識等を活用する力がついてきている。

授業改善を中心とした取組により、児童の学力が確実についてきている。無解答率も下がっている。

イ　児童の学習状況について

学校評価の結果を過去５年間で比較してみると、研究を始めた平成 28 年から「自分の考えを友達や先生に伝えることができる」と答えた児童が約 100 名

増えた。

ウ　研究発表会から

子どもの学ぶ姿勢を評価していただいた意見が多くあり、目に見える形で子供の成長を見ることができた。国語科を中心として、他教科との横断的な授業づくり等、国語科を核とした教科等横断的な授業への取組が評価された。

２．実践研究全体の成果

(1)　「ＰＤＣＡ改善サイクル」の共通実践

県、市町、学校レベルでスケジュール感を共有し、同一歩調で取り組むことで子どもたちの学力向上を目指してきた本県の「ＰＤＣＡ改善サイクル」（Ｗ－ＰＤＣＡサイクル）は、ここ数年で確実に定着してきている。

この「ＰＤＣＡ改善サイクル」に則って推進されてきた学力向上推進プロジェクト事業を中核にして本研究を進めたことで、推進地域、推進地区、協力校との間で、学力向上に向けた具体的な支援や取組について共通理解を図ることができた。

(2)　推進地区の取組

推進地区においては、全国学力・学習状況調査結果を詳細に分析し、早期に自校の実態を把握して授業改善に生かせるような各学校へのサポート体制が充実してきている。

また、それぞれの市で、研修テーマの市内統一や、市独自の早期対応等、特色ある学力向上の取組が推進されていることも、本研究を行った大きな成果と言える。

(3)　協力校の取組

協力校においては、全国学力・学習状況調査結果を詳細に分析し、早期に自校の実態を把握して授業改善に生かす取組が積極的に行われた。サポートチームや推進地区の指導主事が、協力校の実態を踏まえた適切な助言を行ったことで、校内研修がより活性化された。

３．取組の成果の普及

(1)　推進地域

全国学力・学習状況調査分析会において、全国学力・学習状況調査の問題や本県の現状と課題について共有し、早期に学校改善、授業改善に生かすための教員用動画コンテンツを作成した。作成した動画コンテンツ（国語編、算数・数学編、質問紙編）を県教育委員会ＨＰ上に公開し、夏季休業中の校内研修での活用を各学校に促した。推進地区と協力校の研究実践については、「学力向上推進協議会報告書」に推進地区と協力校の研究実践を掲載し、全市町教育委員会、県内全小中学校に配布した。

(2)　推進地区

ア　伊豆市

伊豆市教育センター教育課程委員会（教務主任対象）や研究推進委員会（研修主任対象）等の各種会合において、調査結果を踏まえた授業改善の視点を周知するとともに、各校の取組状況について情報交換を行った。また、伊豆市教育センター主催の授業研において、協力校が授業改善の視点を踏まえた授業を公開することで、「力の付く授業」について問い直した。２月の伊豆市教育センター総会では、協力校による実践発表を行い、授業づくりのポイントや手立てを共有した。

イ　湖西市

第一回湖西市学力向上検討会において、各校主幹教諭・教務主任を対象に、静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容について伝達をした。また、市内小中学校の学力における課題を中心に分析し、授業改善の必要性について説明した。

また、湖西市「学びの基礎　７つの取り組み」を発行し、学力向上の基礎づくりを家庭とともに推進している。

○　今後の課題

本研究を通して、本県の児童生徒の学びに対する姿をより明確に把握することができるようになった。児童生徒同士の学び合いや、付けたい力を意識した授業、校内研修の持ち方など、学校改善・授業改善が推進されたことは大きな成果と言える。

しかし、児童生徒の学ぶ意欲をどう引き出していくのかという経年的な課題も浮き彫りになってきた。

今後も、こうした課題をさらに焦点化した上で、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善に取り組めるよう更なる改善プランをまとめ、地道に啓発していく。

（別紙３：様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	静岡県	番号	22

推進地区名	伊豆市

1　研究課題

読解力の育成をめざす国語科・算数（数学）科の授業改善

〈本研究を通して達成しようとする目標〉
・学力定着に課題を抱える学校数を３校以内にする。
・国語が好きな児童生徒の割合を増やす。【小学校 60%以上、中学校 75%以上】
・算数・数学が好きな児童生徒の割合を増やす。【小学校 75%以上、中学校 60%以上】
・国語科における「書くこと」「読むこと」の正答率が全国＆県平均をクリアする。
・小学校算数Ｂ、中学校数学Ｂにおける二極化を解消する。

2　研究課題への取組状況

(1) 全国学力・学習状況調査、および標準学力調査（CRT）の活用

ア　全国学力・学習状況調査について、各校に対して自己採点による結果分析と課題把握を促すとともに、県の早期対応への取組に対して積極的なデータ提出を依頼した。また、標準学力調査（CRT）については、モニター期間の終了に伴い、今年度から学校単位での実施となった。継続して実施する学校については、調査結果および経年比較による分析をもとに、自校の課題を明確化し、校内研修や授業改善に生かすよう指導した。

イ　全国学力・学習状況調査における伊豆市の調査結果の分析と考察、および授業改善の視点をまとめ、各校に配付した。また、自校の結果分析と考察、および具体的な方策についての報告を依頼し、各校の取組状況の把握に努めた。さらに、県の分析支援ソフトの活用を推奨し、自校の課題を多面的に分析することで、学校改善・授業改善に生かすよう指導した。

(2) 伊豆市教育センター各種研修会や市教研の充実

ア　伊豆市教育センターの各種研修会において、早期対応の結果をもとにした分析と考察、および授業改善の視点について周知した。

イ　教職員の授業力向上を目標に、今年度から各校の研修テーマを「自ら学習に向かい、学び合いを通して、力が付く授業づくり」に統一した。市共通のテーマを設定することで、各校における研修の充実を図った。指定校による授業研

究会（６月）や教育センター総会（２月）において、指導方法や具体的な手立てを共有した。

ウ　７月の夏季研修会では、静岡大学教職大学院教授の原田唯司氏を招聘し、「特別な支援を必要とする子どもの見立てと対応」と題して講演会を開催した。

エ　11 月には協力校による研究発表会を開催し、２年間の取組の成果について伊豆地域の学校を中心に広く発信した。

(3) 市内全小中学校への指導主事派遣

ア　全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、各校における授業改善のためのＰＤＣＡサイクルの土台づくりを推進するべく、担当指導主事が各校を訪問し、授業改善と学力向上に向けた取組について指導・助言を行った。

イ　協力校の要請に応じて担当指導主事を派遣し、授業改善と校内研修の充実を図った。

※ ６/２ 校内授業研（算数）　　６/30 校内授業研（国語）
　９/13 地域支援課訪問同行　　10/11 校内研（発表会に向けた授業案検討）

(4) 伊豆市教育センター教育課程委員会の活用

ア　第１回委員会（５/15）において、自校採点による結果分析と合わせて「今、求められている学力」の把握に努めるよう助言した。

イ　第２回委員会（12/４）において、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、伊豆市における児童生徒の抱える課題について伝達した。また、各校において、児童生徒の学習状況を正しく把握することにより、指導方法や教育課程の検証・改善に努め、分かる授業や個に応じた指導の充実を図っていくよう指導・助言を行った。

(5) 全国学力・学習状況調査結果の公表

ア　全国学力・学習状況調査の結果に基づき、学習活動の充実と学力のさらなる向上を図るため、保護者向け啓発リーフレットを作成し、市内児童生徒の全家庭に配付した。また、本リーフレットは伊豆市のホームページで公開し、地域との情報共有を図るようにした。各校に対しては、自校の結果と対策について、ホームページと学校だより等で公表することを依頼した。

イ　保護者向け啓発リーフレットは、市内全保育園・こども園に掲示を依頼し、学校教育に対する理解を図るとともに、就学に向けた意識の啓発を図った。

３　実践研究の成果の把握・検証

【本市における取組の成果】

(1) 全国学力・学習状況調査の活用について

早期対応に係るデータ提出の呼びかけに対して、市内 11 校すべての協力を得た。各校が独自に採点・集計及び分析を行い、早期に自校の実態を把握して授業改善に生かそうとしていることがうかがえる。また、３年間の調査モニター終了後も、標準学力調査（CRT）を継続する学校が多く、調査結果と合わせて分析をすることで各校の課題がより明確になり、研修の充実につながった。

結果公表を受けて、全国学力・学習状況調査における市の調査結果の経年比較による分析と考察、および授業改善の視点をまとめ、９月の校長会を通じて各校

に配付（学校止まり）し、本市の課題について共有した。

さらに10月末には、自校の結果分析と考察、および具体的な方策についての報告書の提出を依頼し、各校の学校改善・授業改善への取組状況の把握に努めた。

(2) 伊豆市教育センターによる事業の充実について

伊豆市教育センター教育課程委員会（教務主任対象）や研究推進委員会（研修主任対象）等の各種会合において、調査結果を踏まえた授業改善の視点を周知するとともに、各校の取組状況について情報交換を行った。

また、伊豆市教育センター主催の授業研（６/16中伊豆小・中伊豆中、11/８修善寺小）において、授業改善の視点を踏まえた授業を公開することで、「力の付く授業」について問い直す契機となった。また、２月の伊豆市教育センター総会において協力校による実践発表を行い、授業づくりのポイントや手立てを共有した。

さらに、伊豆市教育センター夏季研修会では、静岡大学教職大学院教授の原田唯司氏を講師に「特別な支援を必要とする子どもの見立てと対応」という演題で講演会を開催し、特別支援教育の視点に立った授業改善のあり方について、示唆を得た。

(3) 市内全小中学校への指導主事派遣について

地域支援課による定期訪問に同行し、各校の授業改善に向けた取組状況を把握するとともに、調査結果と学習意欲に関する質問紙調査の結果との関連から、本市の課題について共通理解を図った。

(4) 全国学力・学習状況調査結果の公表について

保護者向け啓発リーフレットを作成し、小中学校の保護者への配付はもちろん、市内保育園・こども園への掲示を依頼したり、市のホームページで公開したりすることで、学校・家庭・地域が連携して、子どもの学力向上や学習環境の改善に取り組めるようにした。

【平成29年度調査による達成目標の評価】

(5) 「学力定着に課題を抱える学校数を３校以内にする」について

（表１） **学力に課題を抱える学校数**

校種別	H28⇒H29
小学校	0⇒2
中学校	2⇒1
小中計	2⇒3

（表２） **学力に課題を抱える教科別学校数（H28⇒H29）**

教科	国語Ａ	国語Ｂ	算・数Ａ	算・数Ｂ
小学校	0⇒3	1⇒2	1⇒2	2⇒2
中学校	1⇒1	0⇒0	2⇒0	1⇒1

表１にあるように、平成29年度調査において、学力定着に課題を抱える学校数は３校となり、目標値をクリアする結果となったが、表２から課題を抱える教科別の学校数を比較してみると、中学校は、すべての教科区分で改善傾向にあるものの、小学校に課題があることがわかる。

(6) 「国語が好きな児童生徒の割合を増やす【小60%以上、中75%以上】」について

「国語の勉強は好きですか」という質問について、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、下表のようになっている。

質問紙項目	年度	H28	H29
国語の勉強は好きですか（小）	伊豆市	52.6	**47.8**
	全国比	-5.7	-12.7
国語の勉強は好きですか（中）	伊豆市	52.5	**56.7**
	全国比	-7.3	-3.8

小学校・中学校ともに、目標値には届いていない。また、前年度の結果と比べると、中学校はわずかに改善傾向にあるものの、小学校は大幅な減少となっている。

(7) 「算数・数学が好きな児童生徒の割合を増やす【小 75%以上、中 60%以上】」について

「算数・数学の勉強は好きですか」という質問について、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、下表のようになっている。

質問紙項目	年度	H28	H29
算数の勉強は好きですか（小）	伊豆市	70.1	**65.1**
	全国比	＋4.1	-0.8
数学の勉強は好きですか（中）	伊豆市	54.5	**62.1**
	全国比	-1.5	+6.7

小学校は全国とほぼ同じ値となり、中学校では目標値をクリアする結果となった。経年では、小学校で数値を下げているものの、中学校では大きく改善している。

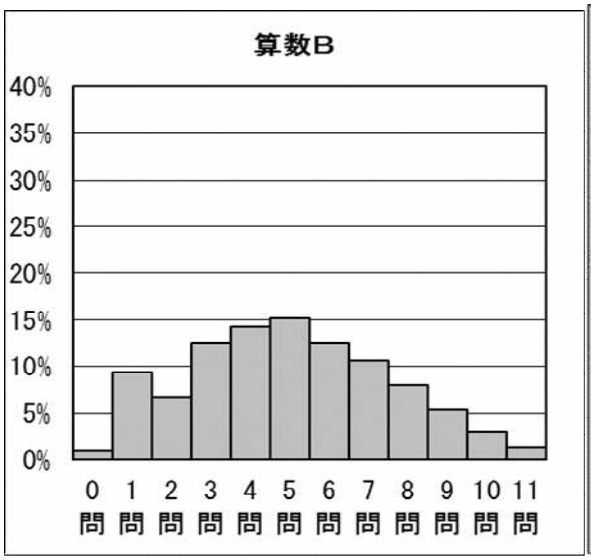
(8) 「国語科における『書くこと』『読むこと』の正答率が全国・県平均をクリアする」について

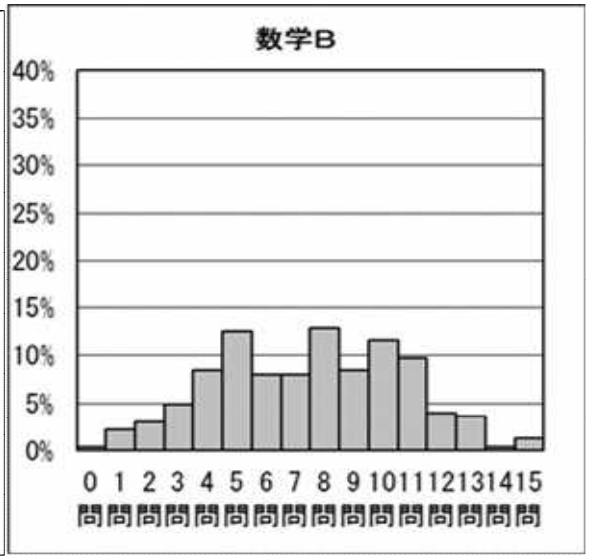
学習指導要領の領域	年度	H28		H29	
	種別	A	B	A	B
書くこと（小）	伊豆市	**75.4**	**57.1**	**70.3**	**56.9**
	全国比	+2.6	+3.7	+9.7	+3.5
	県比	-0.3	+3.2	+8.4	+1.7
書くこと（中）	伊豆市	**76.9**	**64.2**	**88.4**	**69.1**
	全国比	+3.2	+5.9	+2.7	+8.3
	県比	+1.4	+0.6	+1.1	+6.1
学習指導要領の領域	年度	H28		H29	
	種別	A	B	A	B
読むこと（小）	伊豆市	**76.3**	**73.7**	**70.2**	**54.0**
	全国比	-2.2	+4.4	+0.1	+4.8
	県比	-2.8	+3.4	-0.8	+3.4
読むこと（中）	伊豆市	**79.9**	**71.5**	**77.6**	**77.0**
	全国比	+1.3	+5.0	+3.8	+4.9
	県比	-0.5	+1.6	+1.9	+2.9

小中学校の国語Ａ・Ｂともに、「書くこと」「読むこと」について改善傾向に

あると言える。小学校国語Ａの「読むこと」において、わずかに県平均に届かなかったものの、目標はほぼクリアしたと考えてよいだろう。

(9)「小学校算数Ｂ、中学校数学Ｂにおける二極化の解消」について





上のグラフから、小学校算数Ｂにおいて若干下位層に偏りはあるものの、2 極化は概ね解消している。しかし、中学校数学Ｂにおいては二極化の傾向は依然として顕著である。

４　今後の課題

児童生徒質問紙調査から、学習意欲に関する質問「国語（算数・数学）は好きですか」について、本研究に取り組む前【H27】の結果と比較する。

質問紙項目	年度	H27	H29
国語の勉強は好きですか（小）	伊豆市	50.2	**47.8**
	全国比	-10.9	-12.7
国語の勉強は好きですか（中）	伊豆市	66.9	**56.7**
	全国比	+6.4	-3.8

小学校国語は、３の(6)から平成 28 年度こそ、わずかに改善傾向が見られたものの、全国の結果とは依然として大きな開きがある。中学校においても、平成 28 年度以降、全国を下回る結果が続いている。反面、課題であった「読むこと・書くこと」の領域の正答率は、小中ともに大幅に改善している。また、教科全体の結果も良好であることを考えると、国語に対する学習意欲の向上を図ることは、本市にとって大きな課題であると言える。

質問紙項目	年度	H27	H29
算数の勉強は好きですか（小）	伊豆市	71.1	**65.1**
	全国比	+4.5	-0.8
数学の勉強は好きですか（中）	伊豆市	52.1	**62.1**
	全国比	-3.9	+6.7

一方、小学校算数では、今年度こそ全国をわずかに下回ったものの、平成 27,28 年度は高い数値で推移している。また、中学校数学においては明らかに改善傾向に

あり、教科全体の結果も高い水準にあることから、これまでの取組が成果として表れていると考えてよい。中学校Ｂ問題における二極化の問題は残るが、意欲の面からも、学力の面からも改善傾向にあることから、今後の結果を注視していきたい。

　そこで、次年度以降は、「児童生徒の興味関心を高め、主体的な学びを促す授業づくり」について、国語科の取組を中心に研修を推進していく。

・市内統一の研修テーマによる研修推進体制を継続する。
・小中連携による研修体制を構築し、研修内容の共有化を図る。
・小学校を中心に、国語科を窓口教科とした校内研修を推進する。
・伊豆市教育センター主催の授業研において、可能な限り国語科の授業を公開し、相互に参観し、研修する場をもつ。
・授業における目標（学習の見通し）と振り返りの活動を重視し、児童生徒主体の学びを保証する。
・ＰＤＣＡサイクルによる授業改善の一環として、児童生徒による授業評価アンケートを定期的（年２回）に実施する。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	静岡県	番号	２２

推進地区名	湖西市

○　推進地区として実施した取組内容

１．研究課題

・子供が興味・関心を持ち、主体的に学ぶ単元構想と授業づくり

・知識や情報を活用しながら、考えをまとめ、表現することができる力の育成と教科等横断的な視点を大切にした教育活動

２．研究課題への取組状況

(1) 学力・学習状況・生活習慣について把握し分析する

学力についての現状を把握して分析するために、全国学力・学習状況調査後、「湖西市版早期対応」に取り組んだ。昨年度の同「早期対応」から明らかになった課題と改善策を今年度の結果と照らし合わせ、さらに具体的方策を考えて授業改善に活かした。また、「結果概要版」「結果詳細版」を作成し、課題の分析結果をＨＰ掲載や便りを通じて家庭・地域に知らせ、家庭学習への関心を深めた。

また、湖西市学力向上検討会を実施し、各校主幹教諭・教務主任に向けて静岡県学力向上推進協議会の内容伝達や全国学力・学習状況調査の湖西市全体の分析結果について伝達した。

(2) 授業改善に向けての学校支援

市教育委員会の学校訪問時に指導主事が研修主任と面談して研修推進における状況を随時確認し、校内研修の進め方について助言した。また、研修指導員が市内小中学校からの要請を受け、授業づくり・指導案作成において関係職員とともに検討を行うなど、授業改善に向けて具体的なサポートをした。

(3) 市内小中学校の連携を深め、授業力を高め合う

ア　協力校(新居小学校)への支援

県教育委員会サポートチーム派遣事業を活用し、静西教育事務所の指導主事による指導を依頼した。協力校での研究授業を参観し、その授業での付けたい力と単元構想の相関性を視点として、授業づくりへの指導・助言をいただいた。県教育委員会義務教育課の指導主事からは、資質・能力の育成についても御指

導いただき、教科等横断的な視点を大切にした授業構想がなぜ必要なのかについて講話をしていただいた。

また、市教育委員会指導主事と研修指導員が協力校の授業を定期的に参観し、事後の研究協議のなかで授業の視点に照らして助言をした。さらに、学校から要請を受け、授業者や当該学年職員とともに単元構想について考えるなど、学習指導案の検討をした。

イ　湖西市学力向上検討会

・第一回

各校主幹教諭・教務主任を対象に、静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容について伝達をした。また、市内小中学校の学力における課題を中心に分析し、授業改善の必要性について説明した。

・第二回

静西教育事務所の指導主事を講師に招聘し、学校訪問により把握した校内研修の実態をもとに授業改善に向けての指導・助言を依頼した。さらに、各校の研修主任が自校の授業研究を振り返り、演習をとおして成果と課題を明らかにした。また、協力校である新居小学校の主幹教諭が今年度の研究の成果と課題について報告をし､授業改善に向けての具体的な方策について情報を発信した。

(4) 学力向上の基礎づくりを家庭とともに推進する

「学びの基礎　７つの取り組み」の資料を、各家庭に配布。学力向上の基盤となる生活習慣の大切さを保護者に伝え、学校と家庭が共通理解をしながら児童生徒の学びを支えていくよう啓発をした。

（湖西市「学びの基礎　７つの取り組み」）

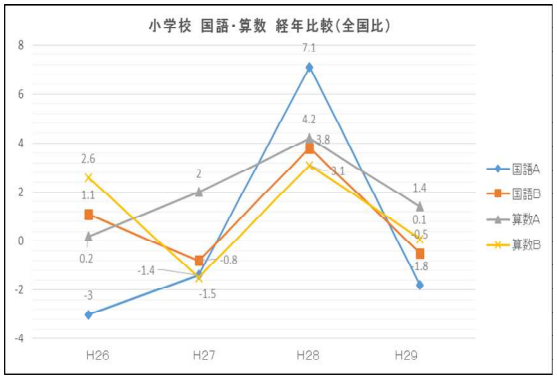
３．実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力学習状況調査の結果

ア　設問別調査結果より

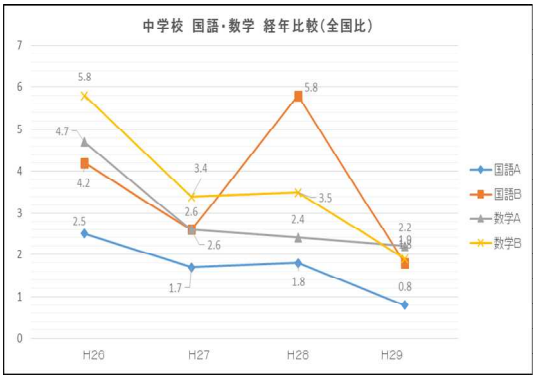
小学校においては、図１のとおり、平成 28 年度は前年度と比べて全体的に改善傾向が見られた。また、平成 29 年度においては、算数Ａは全国平均を上回り、国語Ｂ、算数Ｂはともに全国平均とほぼ同じ結果となった。国語Ａについては全国平均をやや下回っている。

図１　湖西市立小学校国語・算数経年比較(全国比)



（資料：全国学力・学習状況調査）

図２　湖西市立中学校国語・数学経年比較(全国比)



（資料：全国学力・学習状況調査）

中学校においては、平成 29 年度も平成 28 年度までと同様に国語Ａ・Ｂ、数学Ａ・Ｂともに全国平均を上回っている。（図２）

イ　活用に関する問題より

小学校・中学校学習指導要領（国語）の領域における「活用力」に関連する問題の平均正答率から

※領域のなかで傾向が類似している問題に特化し、比較した。　（平均正答率　%）

	学習指導要領の領域	Ｈ２８	Ｈ２９
小学校	書くこと （１）エ「引用したり図表やグラフなどを用いたりして自分の考えが伝わるように書くこと」に関する問題	全国　43.4	全国　70.9
		湖西市　40.7	湖西市　72.6
		比較　－2.7	比較　＋1.7
中学校	書くこと （１）ウ「事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように説明や具体例を加えたり描写を工夫したりして書くこと」に関する問題	全国　73.2	全国　57.6
		湖西市　73.6	湖西市　60.2
		比較　＋0.4	比較　＋2.6

昨年度と比較すると、中学校では「活用しながら書く」力が着実に伸びてきており、小学校においては課題となる領域であったが、わずかに伸びを示している。

各校より、前年度から今年度に掛けての早期対応策が挙げられた。「活用力」を付けるための授業改善の手だてとして、以下の内容にまとめられる。

○今回出題されたような、対話的な学びのある活動を見据えて授業をデザインしていく必要がある。
○長い文章から問われていることや必要となる事柄を選び出せるよう、新聞記事を要約したり、読書であらすじを紹介したりする活動を行っていく。
○複数の条件に合わせて書いたり、複数の資料や多くの情報から必要な情報を選んで書けるようにしたりするために、線を引く、付せんを貼る、表にまとめる、チャート図にするなど、情報の整理の仕方を授業の中で指導する。
○他教科・領域でも、「キーワード」を用いて書く機会を設定する。
○国語のみならず全ての教科領域において、資料として示されるものの分析等を子供自身ができるようにしていかなくてはならない。書く活動を継続していくことはもちろん、資料の読み取り、活用についても取り組む必要がある。

(2) 湖西市学力向上検討会より

市内小中学校の授業実践の課題としては、指導が先に立ち、教師主体の授業展開になっていたことや、小集団での伝え合いは行われているものの「何のために話合いをするのか」という目的意識や「話し合いたい」という必要感を持たずに子供が交流を行っていたことなどがあげられる。

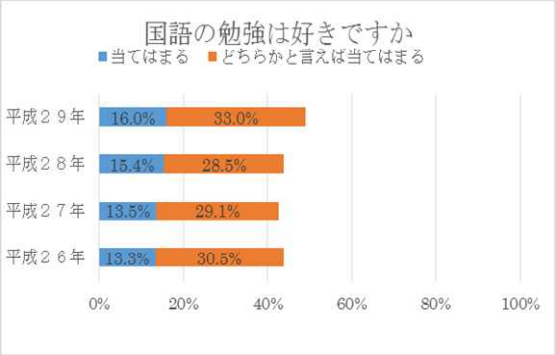
検討会では、今回の全国学力・学習状況調査の結果から得た成果と課題を活かし、自校の研修を活性化させていくことや、新学習指導要領の実施を意識しながら教育課程に反映させていくこと等の意見が交わされた。徐々にではあるが、「主体的に課題解決に向かう子供の姿を後押しする授業」「子供の思いや考えを大切にする授業展開」ということを意識する実践が増えつつある。

なお、平成 28 年度から引き続き、第２回においては静西教育事務所の指導主事から研修主任に向けて、授業改善推進のための指導・助言をいただいた。また、市内各小学校と中学校の研修の充実に活かしていくことをねらいとし、協力校である新居小学校の主幹教諭から二年間の研究による成果と、校内研修のあり方について講話を聴く機会を設けた。各校研修主任からは、「学校全体が自校の子どもたちの学力の状況を共通理解し、授業改善に向けて組織的に取り組むことが大切だと再認識した」「子どもの学力について、評価の妥当性を吟味して分析する重要性を感じた」等の感想が聞かれた。

４．今後の課題

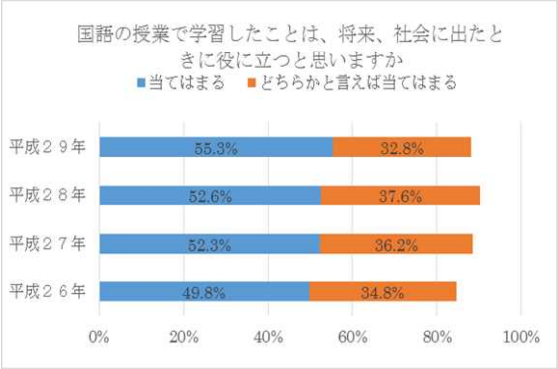
研究協力校である新居小学校においては、平成 28 年度・平成 29 年度では、以前と比べて積極的に自分の考えを伝えることができる子供が増えてきたことが、学校からの報告分析からも分かる。校内研修における子供の姿として、「国語の授業を楽しみにしている」「書くことへの抵抗感が減った」「学習に見通しをもって取り組んでいる」等の成果が得られている。また、教職員へのアンケートによると、自分の授業や指導について、「付けたい力に効果的な言語活動を意識することができた」「教師の指導する場面だけでなく主体的な学びや対話の場面を意識して授業を組み立てることができるようになった」「国語で身に付けた力を他教科でも生かしていけるように授業をデザインすることができた」という意見があった。

図３　湖西市立小学校質問紙における結果



(資料：全国学力・学習状況調査)

図４　湖西市立小学校質問紙における結果



(資料：全国学力・学習状況調査)

湖西市全体で見てみると、小学校においては「国語の勉強は好きですか」（図３）という質問に対しては 49%の子供が肯定的な回答をしており、平成 28 年度と比べると 5.1 ポイント上昇している。「国語の授業で学習したことは将来社会に出たときに役に立つ」（図４）と答えた子は、平成 29 年度は 88.1%であり、多くの子供が国語学習の大切さを理解していることが分かる。

今後は、協力校の実践に学び、教科等横断的な視点も大切にしながら活用力を育む教育活動について教育課程全体をとおして取り組むことができるよう市内各小中学校に継続して呼びかけていく。そして「湖西市学力学習研究課題」の周知と、それを授業改善につなげる支援体制を強化していく。引き続き湖西市の子供たちが主体的に学ぶことのできる授業づくりの啓発をし、知識や情報を活用しながら考えをまとめ、表現することができる力を育んでいきたい。

（別紙３：様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	静岡県	番号	２２

協力校名	静岡県伊豆市立修善寺小学校

１　当初の課題

本研究協力校の指定を受け、２年目となる。昨年度は、一昨年の平成 27 年度全国学力学習状況調査の結果【表１】を受けて、「わかる授業をめざす授業改善」と「つけたい力を明確にした継続的な取り組み」の実践を通して、学力の向上・定着を図ってきた。

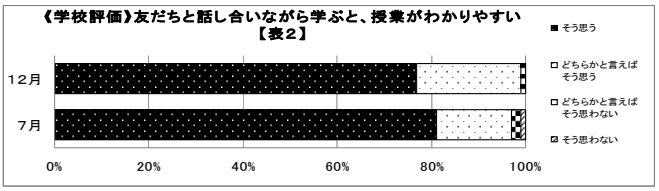
その結果として、【表２】【表３】では、友だちと話し合いながら学ぶ授業はわかりやすく、内容もわかると肯定的（そう思うとどちらかと言えばそう思うの合計）にとらえている児童の割合が多く、増えてもいることから、思考力や表現力、意欲の向上がうかがわれる。また、平成 28 年度静岡県定着度調査【表４】では、４学年が県平均を大きく上回り、基礎学力の向上が見られた。これらは、本校の取り組みの成果であったと考えている。

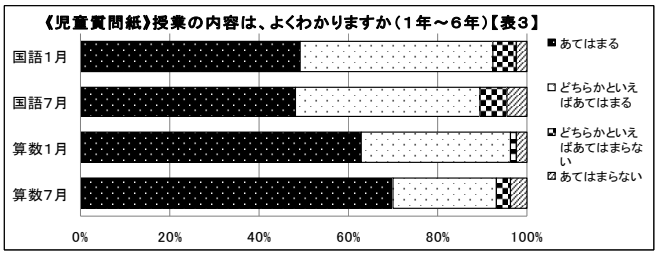
ただ、標準学力調査の算数【表５】では、昨年度よりは向上しているものの、全国の平均正答率を下回る学年がほとんどあり、十分な学力の向上・定着が図られたとは言いがたい現状である。特に低学年における活用の力は差が大きい。また、定着度調査で県平均を下回った学年をはじめ、全体的に個人差が大きいことや、自信をもって授業がわかると答えられる子の割合が減っていること、すすんで話し合う姿は多く見られるようにはなったが、かかわりを通して学びを深める姿があまり見られないなど、まだまだ改善点が見られた。

平成２７年度　全国学力学習状況調査　H27.4　【表１】

	A（知識理解）	B（活用）	勉強は好きか	授業が分かるか
国語	69.6(−0.4)	70.4(+5.0)	58.3(−2.8)	75.0(−7.0)
算数	74.7(−0.5)	36.5(−8.5)	66.7(+0.1)	70.8(−10.2)

［本校正答率　()全国平均との差 %］　［「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」の合計%］





静岡県定着度調査　［本校正答率(県平均との差)］【表４】

	国　語		算　数	
	平成27年度 H28.1	平成28年度 H29.1	平成27年度 H28.1	平成28年度 H29.1
1年	87.0(+0.2)	**90.1(+10.1)**	97.8(+1.6)	**98.2(+7.0)**
2年	90.6(+1.3)	82.3(−2.0)	93.7(+1.3)	89.4(−3.2)
3年	**81.0(+5.9)**	74.8(−5.6)	**90.0(+7.7)**	83.5(−3.1)
4年	69.8(−0.4)	**78.3(+5.6)**	82.6(+2.3)	**83.1(+5.0)**
5年	75.9(−3.1)	**75.5(+7.2)**	**81.1(+6.7)**	**86.6(+6.1)**
6年	81.0(+0.8)	78.9(+4.0)	83.7(+1.1)	**88.6(+4.9)**

＊太字は県平均より、大きく上回ったもの

このような現状から、本校の学力に関する課題は以下のようになる。

・知識や技能の定着と思考力・表現力の向上
・自ら課題を解決しようとする学習意欲の高揚
・自分の考えを表現し合うための、書く力、話す力、聞く力の向上
・話し合いを通して、自らの考えを広めたり深めたりできる相互理解力の育成　等

標準学力調査（H29.4）算数
全国平均正答率との差【表5】

	全体	基礎	活用
2年	−3.6	−3.0	−6.5
3年	−7.9	−7.6	−9.8
4年	−3.6	−3.2	−5.5
5年	−1.0	−1.3	0.6
6年	−3.8	−4.1	−2.6

東京書籍版

これらの課題に向けて、今一度、児童の実態を共有し、昨年度から実践している「わかる授業をめざす授業改善」を中心とした取組を、改善・継続していくことで、学力の向上・定着につなげようと考えた。

2　協力校の取り組み状況

（1）全体構想

全体構想図　【表６】

研究テーマ

『　自ら学習に向かい　学び合いを通して　力がつく授業づくり　』

研究仮説

○授業改善の手だてを共通理解し、実践を積み重ねることで、学び合いを通して課題を解決する力がつき、思考力・判断力・表現力の向上や学力の定着が図られるだろう。
○集団づくりとともに、子どもたちにつけたい力を明確にした取り組みを積み重ねることで、学習意欲や学びを支える力が向上し、主体的な学びができるようになるだろう。

《手だて１》　わかる授業をめざす授業改善

学力の向上・定着

《手だて２》
つけたい力を明確にした継続的な取り組み

《手だて３》
学び合いが生きる集団づくり

効果の検証

・各学力調査の分析　・学校評価等のアンケートの分析　・児童の変容の分析

研究テーマを「自ら学習に向かい　学び合いを通して　力がつく授業づくり」とし、授業改善を中心に、その学びの基盤となる力を教育活動全体で育む、３つの手だてで学力の向上・定着を図った。

（2）具体的な取り組み

《手だて1》わかる授業をめざす授業改善

学力の定着・向上のためには、子どもたちが授業の内容をしっかり理解できることが大切である。本校では、わかる授業を、友だちと関わり合い、自分の考えを広めたり深めたりしながら、理解を深めていく授業と考え、以下の３つの手だてを授業に取り入れて実践を積み重ねている。

●学び合う授業につなげる3つの手だてを共通理解し、実践を積み重ねる。

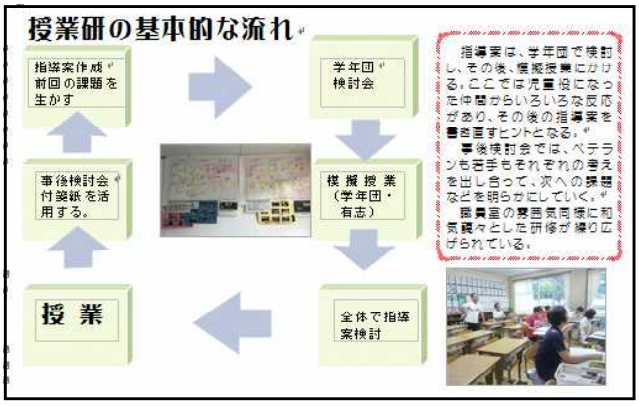
・学習形態の工夫…関わり合うために、目的やつけたい力に合わせて、学習形態を工夫する。
（２人組、小集団、全体、テーマ別　等）

・伝えるための工夫…自分の考えを、深めたり広めたりするために、考えを図や表、文章で書いたり、操作したりしながら、わかりやすく説明する工夫をする。
（ホワイトボードの活用　等）

・発問・支援の工夫…主体的に解決するために、子どもが問いをもつための学習課題の提示を工夫したり、解決の見通しがもてる支援をしたりする。また、変容がわかる振り返りを工夫し、学びの実感や次への課題意識がもてるようにする。
（子どもの思いを生かした学習問題　等）

●授業研究を推進し、授業力の向上を図る。

・一人一回以上の研究授業の実施。学年団、全体での指導案検討、模擬授業の実施。

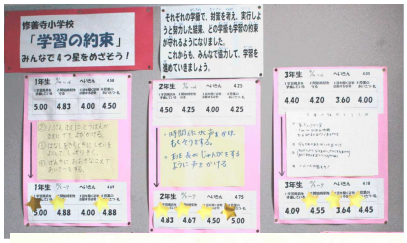


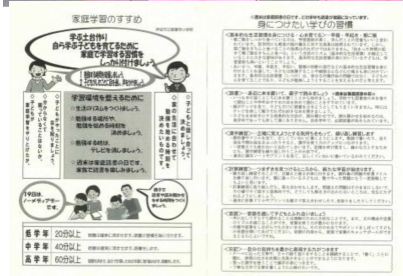
・授業の視点を明確にし、事後研では、視点にそって協議を深め、授業分析を構造化、つながりのある授業研究をすすめる。（ワークショップ型の研修協議）

・外部講師の招聘や指導主事の指導助言を仰ぎ、授業改善を図っていく。

《手だて2》つけたい力を明確にした継続的な取り組み

意欲的に授業に臨み、関わりを通して問題を解決していくためには、児童一人一人に、学習に向かう基本的な姿勢や基礎的な知識技能といった、学びを支える基盤となる力を育むことが大切ではないだろうか。そこで、本校の児童に欠けている力、つけたい力を明確にして、それらの向上・定着をめざし全校同一歩調で、継続して取り組んでいる。





●学びに向かう基本的な姿勢の定着・向上

・話す力、聞く力の向上（「話す」「聞く」ルールの提示）
・相互理解力の育成（各教科等での、話合いの場の設定）
・学習の約束の徹底（学習用具、開始時刻、姿勢、挨拶）
・家庭学習の習慣化（「家庭学習のすすめ」や「自ら学ぶ子へ」による啓発）
・読書活動の推進（多読賞　必読書完読　等）

●基礎的な知識・技能の習得

・既習事項の定着（朝学、ドリルタイム、フォローアップタイム、博 士テスト）
・語彙を増やす取り組み（辞書引き学習、読書活動の推進）

《手だて3》学び合いが生きる集団づくり

相互理解し学びを深めていくためには、安心して発言できる学級集団や学習環境が必要ではないだろうか。ただ、本校の児童は、自己肯定感が低く、難しいことに挑戦してやり遂げる気持ちもけっして強くはない。また、固定化された人間関係の中で、自分の殻を破れない子も多い。そんな子どもたちが、自己の心を成長させ、安心して発言できる学級集団や学習環境を築いていく力、それらも学びを支える基盤となる力と考え、以下の取り組みを継続している。

●個々の意欲の向上や心の成長を促す取り組み

・めあてに向かって主体的に取り組む場の設定（各行事、体力アップコンテスト　等）
・心の健康を考える活動（学校保健委員会、委員会活動　等）
・地域学習や地域人材の積極的な活用（生活科、総合、クラブ）

学校保健委員会の取組

平成２６年度から平成２８年度まで、「心の健康」についての学習を継続している。

平成２６年度　『ポジティブ言葉でパワーを出そう』　柳瀬けい子　氏
平成２７年度　『心の成長をめざして　～友だちと支え合って～』　柳瀬けい子　氏
平成２８年度　『イライラクヨクヨしたとき、どうするの』　谷澤久美子　氏
保護者対象　『子どもとのコミュニケーションの方法』　谷澤久美子　氏

●よりよい人間関係を築く取り組み

・ＱＵテストの活用（全職員での分析会）
・人間関係づくりプログラムの実施
・学級活動の充実（話合いによる主体的な活動の推進）
・縦割り活動の充実（掃除、集団遊び　等）

3　取り組みの成果

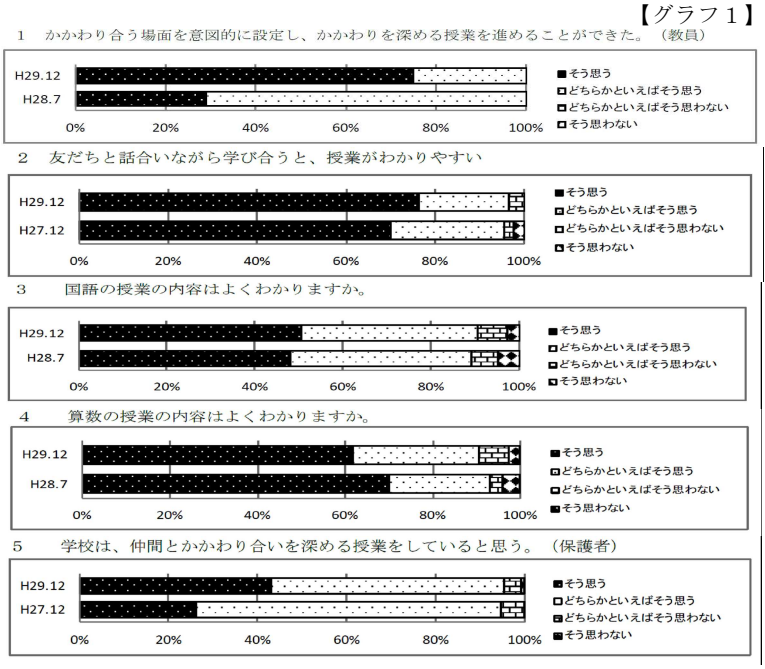
（1）わかる授業をめざす授業改善について

授業改善の手だてを共通理解し、実践を積み重ねるとともに、授業研究を推進してきたことで、先生方の授業への意識が変わり、授業力の向上も感じられた。それによって、「友達と話し合いながら学ぶと授業がわかりやすい」と思う児童の割合が増え、学び合いを通して課題を解決していく力が伸びてきている。

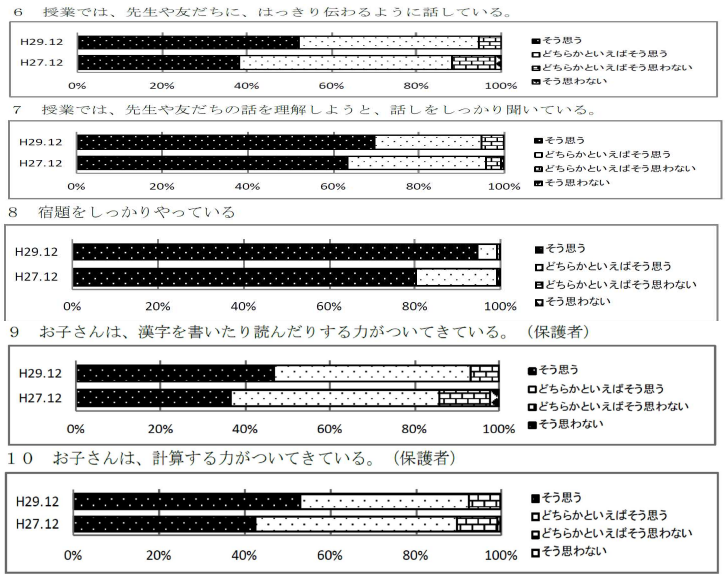
国語においては、授業の内容がわかると答える児童の割合が増え、わからないという子は減っている。算数についても、授業の内容がわからないという子の割合が減っていることから、「わかる授業」へと改善が進んだと考えられる。

また、保護者にも授業改善の意図が伝わり、連携しながら、学力向上へと取り組むことができた。

【グラフ１】



【グラフ２】



（2）つけたい力を明確にした継続的な取り組みについて

取り組みによって、「伝わるように話している。」「しっかり聞いている。」と答える児童の割合が増え、話す力・聞く力の向上が見られた。この力が、授業でも生かされ、すすんで自分の考えを話し、関わり合う姿が多く見られるようになった。また、家庭学習や学習の約束への取組など、学習に向かう基本的な姿勢も向上した。

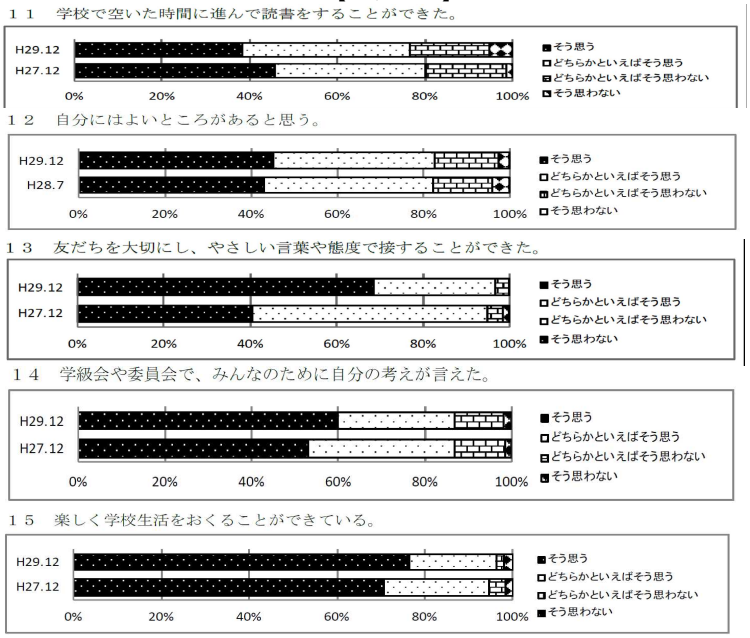
漢字や計算といった既習事項の定着も、朝学やはかせテストなどの取組によって図られ、漢字を書く力や計算の力がついてきていると感じる保護者の割合も増えた。

（3）学び合いが生きる集団づくりについて

これまでの取り組みによって、「目標をもってがんばっている」「自分にはよいところがある」と答える児童の割合が増えたことは、意欲の向上や心の成長がうかがわれる。また、友達にやさしい言葉や態度で接することができた子や、みんなのために自分の考えがいえる子の割合が増えたことも、人間関係や学級集団が、よりよい方向へと向かっているからではないだろうか。学習環境が整ったことが、意欲にもつながり、楽しく学校生活を送ることができる個の割合も増えた。

こうした個や集団の成長が、授業の中の学び合いにも生かされ、意欲的に課題解決に向かう姿が見られようになった。

【グラフ３】



（4）学力調査等より

標準学力調査（東京書籍）正答率の全国平均との差（学年を通してみる）【表７】

国語

全体

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				4.6	
2年	−8.7	−1.6	2.5	3.8	↗
3年	−4.6	−4.3	−1.9	1.7	↗
4年	−5.5	10.2	−0.2	−0.6	↗
5年	−4.6	0.2	4.2	5.8	↗
6年	−4.6	−1.8	−1.6	−3.4	↗

基礎

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				5.3	
2年	−6.8	0.3	2.0	2.7	↗
3年	−4.3	−3.9	−2.5	1.3	↗
4年	−5.9	11.4	1.0	−0.4	↗
5年	−5.6	0.6	4.8	4.7	↗
6年	−5.6	−1.2	−2.0	−4.7	↗

活用

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				1.9	
2年	−17.6	−10.4	5.0	8.9	↗
3年	−5.6	−6.1	0.5	3.1	↗
4年	−3.8	5.1	−5.2	−1.3	↗
5年	0.2	−1.1	1.8	11.1	↗
6年	0.2	−5.0	0.3	2.6	↗

＊→は、H27．4とH29．12の比較

算数

全体

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				4.6	
2年	−1.7	−2.4	−3.6	−2.7	↘
3年	−4.6	−6.7	−7.9	−1.3	↗
4年	−5.7	1.9	−3.6	−5.3	↗
5年	−3.1	−1.8	−1.0	3.8	↗
6年	−3.8	0.1	−3.8	−5.9	↘

基礎

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				2.5	
2年	−0.9	−1.4	−3.0	−3.3	↘
3年	−4.7	−6.1	−7.6	−2.5	↗
4年	−5.4	2.4	−3.2	−4.8	↗
5年	−3.0	−1.8	−1.3	3.1	↗
6年	−2.7	0.9	−4.1	−6.1	↘

活用

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				15.6	
2年	−5.5	−7.4	−6.5	−0.1	↗
3年	−3.1	−10.4	−9.8	2.2	↗
4年	−7.0	0.2	−5.5	−7.4	↘
5年	−3.4	−1.2	0.6	6.4	↗
6年	−8.5	−2.7	−2.6	−7.1	↗

＊→は、H27．4とH29．12の比較

標準学力調査（東京書籍）正答率の全国平均との差（同一集団の経年変化）【表８】

国語

全体

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				4.6	
2年			2.5	3.8	↗
3年		−1.6	−1.9	1.7	↗
4年	−8.7	−4.3	−0.2	−0.6	↗
5年	−4.6	10.2	4.2	5.8	↗
6年	−5.5	0.2	−1.6	−3.4	↗

基礎

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				5.3	
2年			2.0	2.7	↗
3年		0.3	−2.5	1.3	↗
4年	−6.8	−3.9	1.0	−0.4	↗
5年	−4.3	11.4	4.8	4.7	↗
6年	−5.9	0.6	−2.0	−4.7	↗

活用

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				1.9	
2年			5.0	8.9	↗
3年		−10.4	0.5	3.1	↗
4年	−17.6	−6.1	−5.2	−1.3	↗
5年	−5.6	5.1	1.8	11.1	↗
6年	−3.8	−1.1	0.3	2.6	↗

＊→は、はじめの記録とH29．12の比較

算数

全体

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				4.6	
2年			−3.6	−2.7	↗
3年		−2.4	−7.9	−1.3	↗
4年	−1.7	−6.7	−3.6	−5.3	↘
5年	−4.6	1.9	−1.0	3.8	↗
6年	−5.7	−1.8	−3.8	−5.9	↘

基礎

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				2.5	
2年			−3.0	−3.3	↘
3年		−1.4	−7.6	−2.5	↘
4年	−0.9	−6.1	−3.2	−4.8	↘
5年	−4.7	2.4	−1.3	3.1	↗
6年	−5.4	−1.8	−4.1	−6.1	↘

活用

	H27.4	H28.4	H29.4	H29.12	
1年				15.6	
2年			−6.5	−0.1	↗
3年		−7.4	−9.8	2.2	↗
4年	−5.5	−10.4	−5.5	−7.4	↘
5年	−3.1	0.2	0.6	6.4	↗
6年	−7.0	−1.2	−2.6	−7.1	↘

＊→は、はじめの記録とH29．12の比較

正答率の全国平均との差を学年ごとに見てみると、【表７】のように、国語では、全体・基礎・活用ともに、全国の正答率との差が縮まったり、全国の正答率を上回る学年もあったりして向上がみられた。算数では、全国平均には及ばないまでも、差が縮まり向上が見られた学年も多い。特に、２年生、３年生の活用においては、大きな向上が見られた。　また、【表８】の経年変化を追ってみても、国語の力の向上が感じられる。算数では、活用での向上が見られた学年が多いものの、基礎では、やや下がってしまった。

授業改善の窓口は算数で行っているが、話合いを中心とした言語活動によって、国語の力も向上していることがうかがわれた。

【表９】【表 10】の静岡県定着度調査の結果では、今年度は、国語・算数ともに、すべての学年で県の平均正答率を上回り、学習内容の定着がみられた。特に、経年変化【表 10】を見ると、高学年が徐々に力をつけてきているのがわかる。

このように、学力調査等の結果からも、本校の研究の成果が徐々に表れ始めている。

静岡県定着度調査　［本校正答率と県平均正答率との差］【表9】

【学年を通してみた変化】

	国語				算数			
	27年度 H28.1	28年度 H29.1	29年度 H30.1		27年度 H28.1	28年度 H29.1	29年度 H30.1	
1年	+0.2	10.1	+6.5	↗	+1.6	+7.0	+2.6	↗
2年	+1.3	−2.0	+1.6	↗	+1.3	−3.2	+3.1	↗
3年	+5.9	−5.6	+4.1	↗	+7.7	−3.1	+0.4	↘
4年	−0.4	+5.6	+6.3	↗	+2.3	+5.0	+8.5	↗
5年	−3.1	+7.2	+10.4	↗	+6.7	+6.1	+10.4	↗
6年	+0.8	+4.0	+0.9	↗	+1.1	+4.9	+5.1	↗

※矢印は、27年度との比較

静岡県定着度調査　［本校正答率と県平均正答率との差］【表10】

【同一集団の経年変化】

	国語				算数			
	27年度 H28.1	28年度 H29.1	29年度 H30.1		27年度 H28.1	28年度 H29.1	29年度 H30.1	
1年			+6.5				+2.6	
2年		+10.1	+1.6	↘		+7.0	+3.1	↘
3年	+0.2	−2.0	+4.1	↗	+1.6	−3.2	+0.4	↘
4年	+1.3	−5.6	+6.3	↗	+1.3	−3.1	+8.5	↗
5年	+5.9	+5.6	+10.4	↗	+7.7	+5.0	+10.4	↗
6年	−0.4	+7.2	+0.9	↗	+2.3	+6.1	+5.1	↗

※→は、初年度との比較

4　今後の課題

全国学力学習状況調査　本校正答率　（　　）内は、全国平均との差　表 11

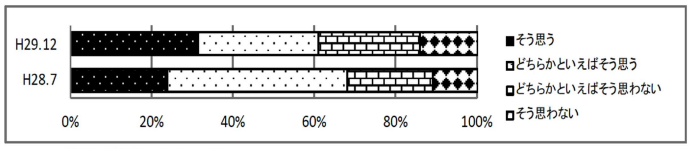
学力調査	平成27年度 H27.4実施・H27.8分液	平成28年度 H28.4実施・H28.8分析	平成29年度 H29.4実施・H29.8分析
国語 A	69．6（−0．4）	74．3（+1．4）	60．0（−6．8）
国語 B	70．4（+5．0）	63．6（+5．8）	56．0（−1．7）
算数 A	74．7（−0．5）	81．7（+4．1）	73．0（−5．6）
算数 B	36．5（−8．5）	47．0（−0．2）	38．0（−7．9）

【表１１】の今年度の全国学力学習状況調査の結果では、国語ＡＢ算数ＡＢともに全国平均を下回っている。全国平均との差も、２年前より広がっていて伸びが感じられなかった。これは、今年度の学級集団は、個人差が非常に大きく、その個人差に個別指導が及ばなかったことが要因としてあげられる。無答率も例年に比べて高かった。これは、授業では、友達と話し合いながら問題を解決できる力がついてきたが、一人になると、自信がもてなかったり、問題文を理解できなかったり、必要な情報を選択できなかったりと、自力解決の力が十分に身についていないのではないかと考えられた。

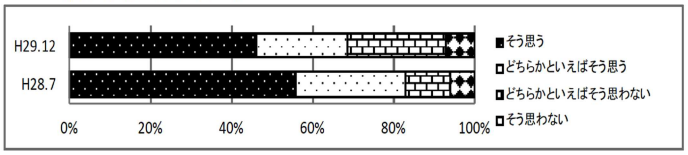
また、標準学力調査の正答率の全国平均との差【表８】では、算数において、活用での力の向上が見られ始めたが、基礎においては伸びが感じられなかった。定着度調査【表 10】では、高学年に比べて、低学年で伸びていない。

【グラフ４】

１６　国語の勉強は好きですか。



１７　算数の勉強は好きですか。



さらには、研究の成果として、学習の内容がわかると答える児童が増えたことを前述したが、【グラフ４】では、国語や算数の勉強が好きと答える児童の割合が減ってしまっている。これは、学習内容はわかるけれど、実は勉強は嫌いだということであり、興味や関心の低さがうかがわれた。

授業の中で、進んで話し合う姿は多く見られるようになったが、発表に終わってしまって、なかなか学びが深まらないのも、これらが要因ではないかと考えられる。

このような現状から、本校の今後の課題を下記のように考えている。

●子どもたちの学習への興味や関心を高め、意欲的に取り組めるようにするために、単元構想や授業構想、発問等を工夫するなど、さらなる授業改善を図っていく。

●現状では、基礎基本、活用ともに十分な力がついたとは言いがたい。今後、さらに向上・定着を図るために、低学年から、基礎基本、活用どちらも大切にし指導の充実を図っていく。

●自力解決ができる力を養っていくために、授業の工夫や個別指導の充実を図っていく。

●授業の充実や学力の向上・定着を図るために、授業を中心に教育活動全体で、子どもたちの意欲や自信を高める取り組みをすすめる。

ここまで、授業改善を中心に、その学びの基盤となる力を教育活動全体で育み、学力の向上・定着を図ろうと取り組んできた。児童のあらわれ等からは、一定の成果が見られるようになり、学力調査等の数値面でも、徐々に向上がみられるようになってきたところである。ただ、子どもたち一人一人に学力が十分に身についているとはいえない現状であり、一朝一夕では学力の向上・定着は図れないことを実感している。

今後、上記の課題に向けて取り組み、さらなる学力の向上・定着を図っていくためには、これまでの取り組みを「改善」「継続」していくことが一番大切ではないかと考えている。そのためには、先生方の授業力、指導力の向上は欠かせない。何でも言い合える職員集団を築き、課題や手だてを納得共通理解したうえで研修を推進していきたい。

研究テーマ「自ら学習に向かい　学び合いを通して　力がつく授業づくり」の具現化をめざしていくことで、次期学習指導要領の重点となっている、「主体的・対話的で深い学び」につなげたいと考えている。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 29 年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	静岡県	番号	22

協力校名	静岡県湖西市立新居小学校

１．当初の課題

平成 27 年度の全国学力・学習状況調査の結果と教職員・児童・保護者からの学校評価から、本校児童には、「問題文や資料を読み解く力」「複数の文章や資料を関連付ける力」「自分の考えをまとめたり、目的や意図に応じて表現（説明）したりする力」に課題が見られた。これは、国語科、算数科にとどまらず、他の教科、領域においても見られる傾向であった。また、「国語の学習が好き」と答える児童の割合は全国平均を下回っていた。

平成 28 年度は、これらの課題を解決するために、研修主題を「自分の考えを伝える力が育つ授業づくり」と押さえ、「目的に応じて自分の考えを整理し分かりやすく伝えられる子」を目指して国語科の授業研究を中心に取り組んできた。

平成 28 年４月の全国学力・学習状況調査（６年）、平成 29 年１月の静岡県学力定着度調査、平成 29 年２月の国語科標準学力調査（３～５年）、平成 28 年 12 月の学校評価（アンケート）の結果では、

○基礎基本の定着は全学年で概ね満足できる状態である。

○「授業中、友達や先生の話をよく聞いている」と答えた児童の割合が上昇した。

H27：91.8P　→　H28：94.9P（＋3.1P）

○「自分の考えを友達や先生に伝えることができている」と答えた児童の割合が上昇した。

H27：72.8P　→　H28：84.7P（＋11.9P）

△国語科の定着度の向上については、学年によって差が見られた。

（国算定着度調査の結果から　県平均を 100 とした場合の経年比較）

	２年	３年	４年	５年	６年
H27	100	99	99	94	98
H28	100	98	107	95	103

△基礎基本の定着の状態に比べると、活用型の力の定着は学年によって差がある。

（平成 29 年２月実施　国語科標準学力調査３～５年）

学年	全国平均（全体）	本校（全体）	全国平均（活用）	本校（活用）
３年	72.2	72.1（- 0.1）	61.8	60.2（- 1.6）
４年	72.2	74.2（+ 2.0）	50.6	48.4（- 2.2）
５年	73.4	78.2（+ 4.8）	46.0	55.9（+ 9.9）

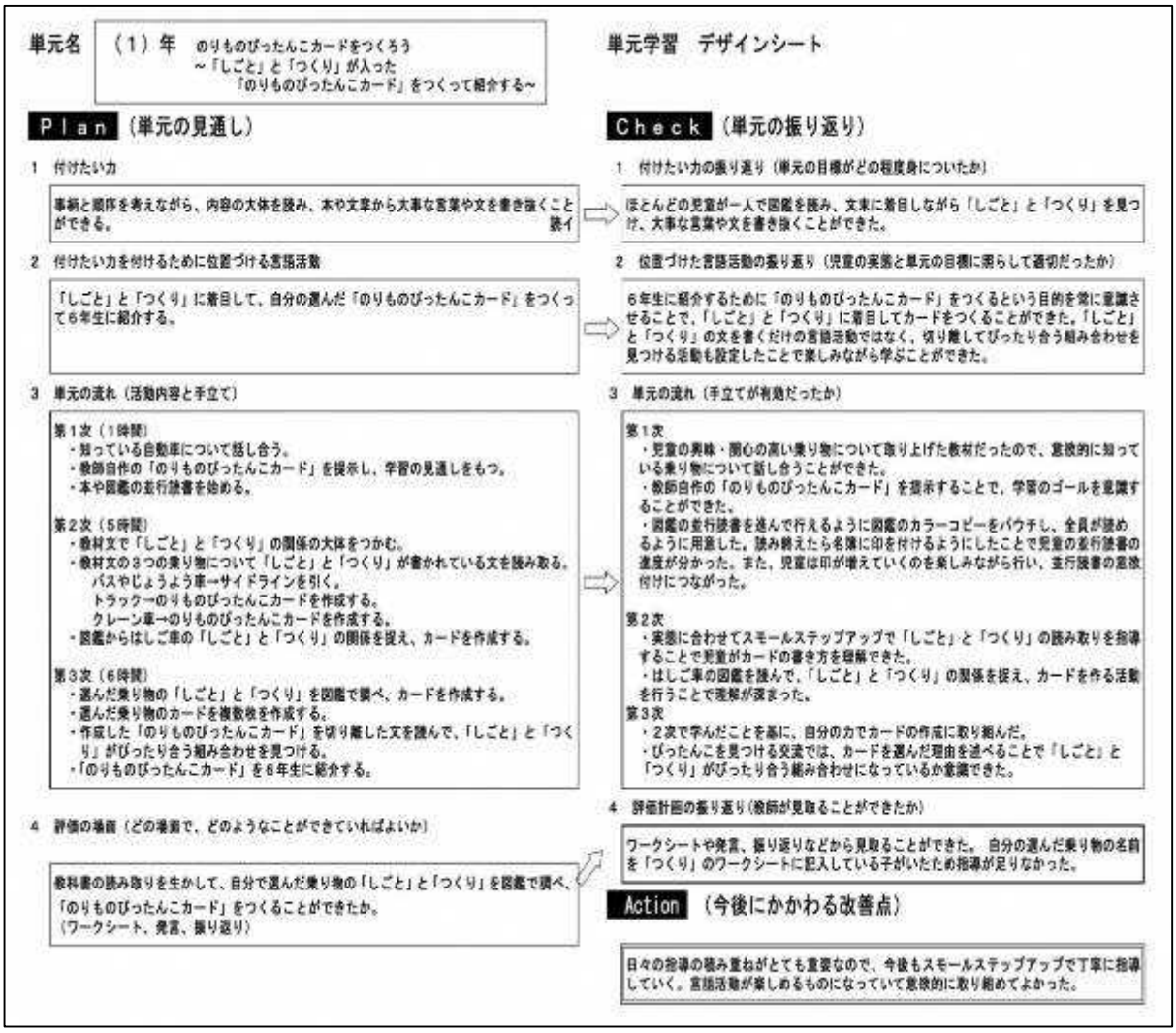
２．協力校の取組状況

上記の成果と課題から、本校の学力向上については授業改善を図りながら確実に進んでいる状態ではあるが、すべてに成果が表れているとはいえない。したがって、平成 28 年度の実践を加除修正しながら継続してじっくりと取り組むと同時に、新たな視点を持って研究に取り組んでいく必要があった。

そこで、平成 29 年度は、平成 28 年度までの国語科の授業改善等の取組をより一層充実させながら、国語科を核とした教科等横断的な授業でも実践を積み重ねていった。

(1) 国語科における一層の授業改善への取組

平成 28 年度から取り組んでいる「単元デザインシート」を学年で作成しながら授業改善を進めた。前年度の実践で得られた知見をもとに、より主体的・対話的で深い学びとなる単元デザインを模索していった。



単元名　（1）年　のりものびったんこカードをつくろう
～「しごと」と「つくり」が入った
「のりものびったんこカード」をつくって紹介する～

単元学習　デザインシート

Plan（単元の見通し）

1　付けたい力

事柄と順序を考えながら、内容の大体を読み、本や文章から大事な言葉や文を書き抜くことができる。　読イ

2　付けたい力を付けるために位置づける言語活動

「しごと」と「つくり」に着目して、自分の選んだ「のりものびったんこカード」をつくって6年生に紹介する。

3　単元の流れ（活動内容と手立て）

第1次（1時間）
・知っている自動車について話し合う。
・教師自作の「のりものびったんこカード」を提示し、学習の見通しをもつ。
・本や図鑑の並行読書を始める。

第2次（5時間）
・教材文で「しごと」と「つくり」の関係の大体をつかむ。
・教材文の3つの乗り物について「しごと」と「つくり」が書かれている文を読み取る。
　バスやじょうよう車→サイドラインを引く。
　トラック→のりものびったんこカードを作成する。
　クレーン車→のりものびったんこカードを作成する。
・図鑑からはしご車の「しごと」と「つくり」の関係を捉え、カードを作成する。

第3次（6時間）
・選んだ乗り物の「しごと」と「つくり」を図鑑で調べ、カードを作成する。
・選んだ乗り物のカードを複数枚を作成する。
・作成した「のりものびったんこカード」を切り離した文を読んで、「しごと」と「つくり」がぴったり合う組み合わせを見つける。
・「のりものびったんこカード」を6年生に紹介する。

4　評価の場面（どの場面で、どのようなことができていればよいか）

教科書の読み取りを生かして、自分で選んだ乗り物の「しごと」と「つくり」を図鑑で調べ、「のりものびったんこカード」をつくることができたか。
（ワークシート、発言、振り返り）

Check（単元の振り返り）

1　付けたい力の振り返り（単元の目標がどの程度身についたか）

ほとんどの児童が一人で図鑑を読み、文章に着目しながら「しごと」と「つくり」を見つけ、大事な言葉や文を書き抜くことができた。

2　位置づけた言語活動の振り返り（児童の実態と単元の目標に照らして適切だったか）

6年生に紹介するために「のりものびったんこカード」をつくるという目的を常に意識させることで、「しごと」と「つくり」に着目してカードをつくることができた。「しごと」と「つくり」の文を書くだけの言語活動ではなく、切り離してぴったり合う組み合わせを見つける活動も設定したことで楽しみながら学ぶことができた。

3　単元の流れ（手立てが有効だったか）

第1次
・児童の興味・関心の高い乗り物について取り上げた教材だったので、意欲的に知っている乗り物について話し合うことができた。
・教師自作の「のりものびったんこカード」を提示することで、学習のゴールを意識することができた。
・図鑑の並行読書を進んで行えるように図鑑のカラーコピーをパウチし、全員が読めるように用意した。読み終えたら名簿に印を付けるようにしたことで児童の並行読書の進度が分かった。また、児童は印が増えていくのを楽しみながら行い、並行読書の意欲付けにつながった。

第2次
・実態に合わせてスモールステップアップで「しごと」と「つくり」の読み取りを指導することで児童がカードの書き方を理解できた。
・はしご車の図鑑を読んで、「しごと」と「つくり」の関係を捉え、カードを作る活動を行うことで理解が深まった。

第3次
・2次で学んだことを基に、自分の力でカードの作成に取り組んだ。
・びったんこを見つける交流では、カードを選んだ理由を述べることで「しごと」と「つくり」がぴったり合う組み合わせになっているか意識できた。

4　評価計画の振り返り（教師が見取ることができたか）

ワークシートや発言、振り返りなどから見取ることができた。自分の選んだ乗り物の名前を「つくり」のワークシートに記入している子がいたため指導が足りなかった。

Action（今後にかかわる改善点）

日々の指導の積み重ねがとても重要なので、今後もスモールステップアップで丁寧に指導していく。言語活動が楽しめるものになっていて意欲的に取り組めてよかった。

(2) 国語科を核とした教科等横断的な授業づくりへの取組

「目的に応じて自分の考えを整理し分かりやすく伝えられる子」に迫るため、国語科の授業改善をベースに、国語科と他教科・領域とを横断させた授業に取り組んだ。これは、本校が目指す国語科の授業改善の重要な一つの視点として捉えていたからである。国語科で身に付けた力が国語科の授業内で完結することなく、他教科の中で発揮されてこそ国語科の授業改善がなされた、と押さえているためであった。その教科等横断的な授業を組んでいくための共通のツールとして「横断デザインシート」を作成し、実践を積み上げていった。このシートは、国語科を核とした横断の在り方（デザイン）を教師が共通理解するためのもので、どのように横断させるか、そのポイントを図表化したものである。本校では、国語科とその横断の相手となる教科・領域との関係を、以下の４つの型に分類し、研究を進めた。

ア　活用型

国語科の指導事項（身に付けた力）を、他教科・領域の学習に活用する。

イ　連携型

国語科で位置づけた言語活動が他教科・領域の学習活動の一部を兼ねる。

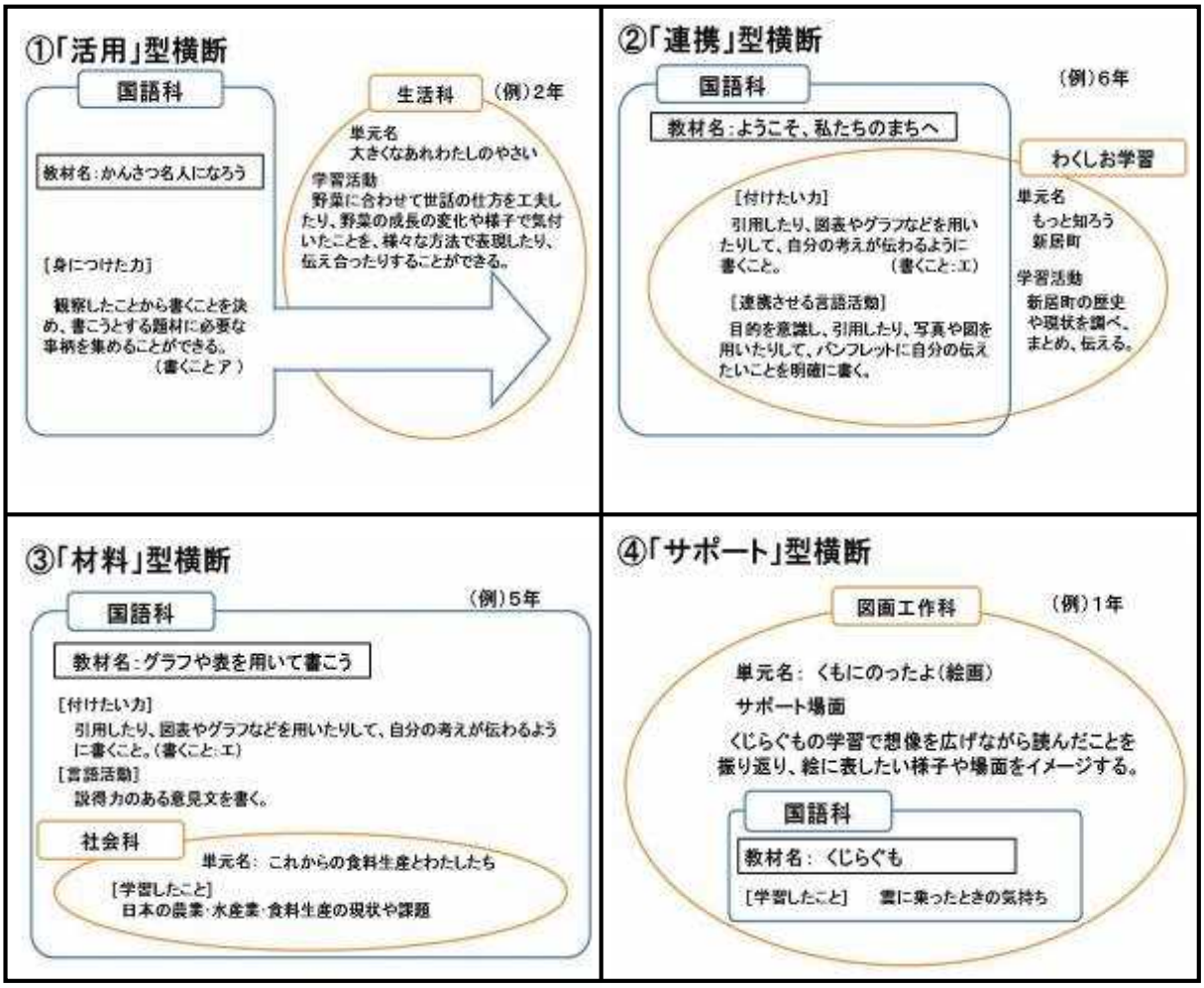
ウ　材料型

他教科・領域で学習したことを言語活動の材料にする。

エ　サポート型

国語科で学習したことが他教科・領域の学習をサポートする。

４つに分類整理されたもののうち、本年度は目指す子供に迫るために、「活用型」「連携型」「材料型」を一つの柱として位置づけ、研究・実践していった。

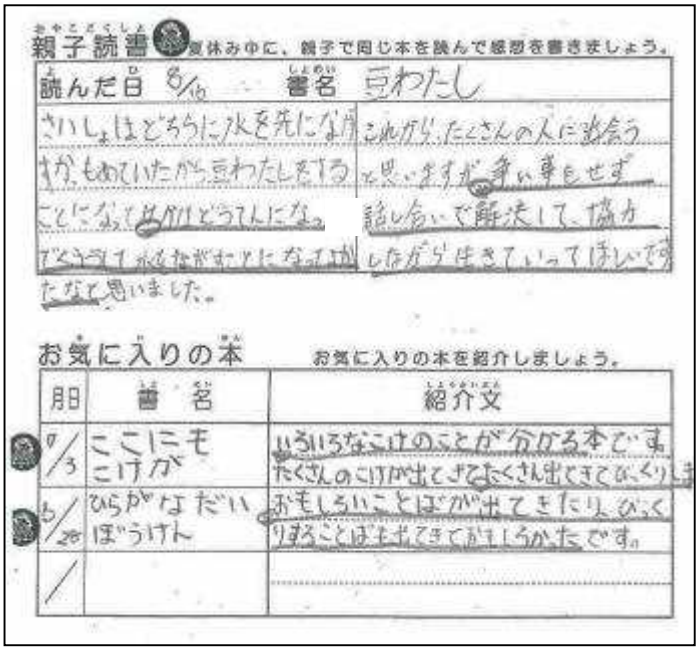


(3) 授業を支えるものへの取組

ア　「漢字チャレンジ」への取組

学習の基礎・基本の定着のために、「漢字チャレンジ」「計算チャレンジ」に継続して取り組んだ。達成状況を学期ごとに調査した結果、本校児童の基礎的学力はどの学年も概ね満足できる結果であった。

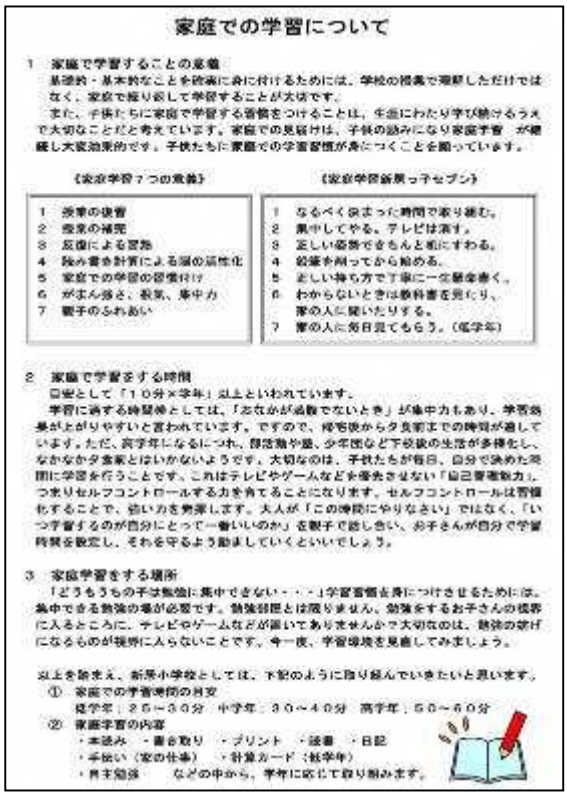
イ　読書へ親しむために朝読書の時間を教育課程に明確に位置づけ（週 15 分 を 2 回）、読書の時間を確保した。「おすすめ図書 80 冊」（あらいっ子読書）を選定し、学年に合った目標冊数を決めて取り組んだ。さ



らに夏休みに親子読書を実施したり、自分のお気に入りの本を「あらいっ子読書カード」に書いたりするなど、工夫した活動に も取り組んだ。また、地域の方のボランティアによる読み聞かせも継続して行うことができた。

ウ　家庭学習の充実

家庭学習の目的や具体的な方法を文書にまとめ保護者に配布するとともに、PTA 総会や懇談会等において紹介した。また、学年便りやホームページ等にも掲載し、各学年の学習の様子を伝えることができた。



家庭での学習について

1　家庭で学習することの意義

基礎的・基本的なことを確実に身に付けるためには、学校の授業で理解しただけではなく、家庭で繰り返して学習することが大切です。

また、子供たちに家庭で学習する習慣をつけることは、生涯にわたり学び続けるうえで大切なことだと考えています。家庭での見届けは、子供の励みになり家庭学習　が継続し大変効果的です。子供たちに家庭での学習習慣が身につくことを願っています。

《家庭学習７つの意義》	《家庭学習新居っ子セブン》
1　授業の復習	1　なるべく決まった時間で取り組む。
2　授業の補完	2　黙々してやる。テレビは消す。
3　反復による習熟	3　正しい姿勢できちんと机にすわる。
4　読み書き計算による脳の活性化	4　必要な物をそろえてから始める。
5　家庭での学習の習慣付け	5　正しい持ち方で丁寧に一定量を書く。
6　がまん強さ、根気、集中力	6　わからないときは教科書を見たり、家の人に聞いたりする。
7　親子のふれあい	7　家の人に毎日見てもらう。（低学年）

2　家庭で学習をする時間

目安として「１０分×学年」以上といわれています。

学習に費する時間帯としては、「お子さんが過敏でないとき」が集中力もあり、学習効果が上がりやすいと言われています。ですので、帰宅後から夕食前までの時間が適しています。ただ、高学年になるにつれ、部活動や塾、少年団など下校後の生活が多様化し、なかなか夕食前とはいかないようです。大切なのは、子供たちが毎日、自分で決めた時間に学習を行うことです。これはテレビやゲームなど必要先きさせない「自己管理能力」、つまりセルフコントロールする力を育てることになります。セルフコントロールは習慣化することで、強い力を発揮します。大人が「この時間にやりなさい」ではなく、「いつ学習するのが自分にとって一番いいのか」を親子で話し合い、お子さんが自分で学習時間を設定し、それを守るよう助ましていくといいでしょう。

3　家庭学習をする場所

「どうもうちの子は無強に集中できない・・・」学習習慣を身につけさせるためには、集中できる勉強の場が必要です。勉強部屋とは限りません。勉強をするお子さんの視界に入るところに、テレビやゲームなどが置いてありませんか？大切なのは、勉強の妨げになるものが視界に入らないことです。今一度、学習環境を見直してみましょう。

以上を踏まえ、新居小学校としては、下記のように取り組んでいきたいと思います。

①　家庭での学習時間の目安

低学年：２５～３０分　中学年：３０～４０分　高学年：５０～６０分

②　家庭学習の内容

・本読み　・書き取り　・プリント　・読書　・日記

・手伝い（家の仕事）　・計算カード（低学年）

・自主勉強　　などの中から、学年に応じて取り組みます。

保護者への配布文書

はじめのいっぽ

新居小学校１年
学年だより
平成２９年６月２３日

楽しい本読み、大事な本読み

ずいぶん音読が上手になってきました。口を開けて、言葉をはっきりと読むことや教室に響く声で気持ちを込めて読むことができる子が増えました。毎日の家庭学習の積み上げの成果です。ありがとうございます。

さて、本読みとは、文字を目で追いながら声に出し、文章に書かれていることを理解していくことです。これは、国語だけでなくすべての学習にとって基本となるものです。「く、ま、さ、ん、が、・・・」というように、一文字一文字読んでいく「拾い読み」では書かれていることの意味は解りません。つまり、言葉のまとまりをとらえ、すらすらと読んでいかなければ、読んで理解することにはつながらないのです。

言葉のまとまりで読んでいくために、子供たちに勧めているのが、親指と人差し指で言葉を一つ一つ挟みながら読んでいく方法です。（わたしたちは、「はさみ読み」と呼んでいます。）

１年生の教科書は、「分かち書き」といって、読みやすいように言葉の句切りで離して書かれています。ですから、分かち書きを利用して、「くまさんが」「ふくろを」「みつけました。」というように言葉を指で挟んで読んでいくと、言葉のまとまりを意識して読むことができるのです。指で挟んで読むと、どこを読んでいるのかが見やすいので、はじめてその文章を読むという時や、なかなかすらすらと読めない時には読みやすい方法です。

１年生学年便り抜粋（はさみ読み）

平成 28 年度からの研究の成果として、平成 29 年 11 月 14 日（火）の午後に、各学年１学級ずつ計６学級の授業公開とその分科会を中心とした研究発表会を開催した。そこでは、国語科の授業と、国語科と他教科・領域を横断させた授業を公開し、分科会では研究に対する意見を多くの方からいただいた。

３．取組の成果の把握・検証

(1) 本校児童の学力について

ア　全国学力学習状況調査結果 平成 29 年度の結果（全国・県・新居小）

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B
全国	74.8	57.5	78.6	45.9
静岡県	74	59	78	46
新居小	77	63	83	49
全国比	＋ 2.2	＋ 5.5	＋ 4.4	＋ 3.1

本校の正答率は、全国、県の平均値を上回っている。国語 B 問題は全国比 +5.5 ポイントとなっており、知識等を活用する力がついてきている。

イ　正答率の経年比較（県平均と新居小との比較）

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B
平成 27 年度	－ 2.9	－ 4.8	－ 2.4	－ 4.3
平成 28 年度	＋7	＋3	＋9	＋6
平成 29 年度	＋3	＋4	＋5	＋3

平成 27 年度は、すべてにおいて県平均を下回っていたが、ここ２年間はすべてにおいて県平均を上回っている。授業改善を中心とした取組により、児童の学力が確実についてきている。

ウ　平成 29 年度国語科における領域ごとの平均正答率（全国と新居小との比較）

	国語 A	国語 B
話す・聞く	＋ 4.6	＋ 6.7
書く	＋ 5.8	＋ 7.3
読む	＋ 3.2	＋ 2.9
言語	＋ 1.6	出題なし

すべての領域で、全国平均を上回った。出題の趣旨で見ると、特によかった項目として、次のものがあげられる。

「目的や意図に応じて構成や内容を工夫して話す」　＋ 12.7
「目的や意図に応じ、引用して書く」　＋ 9.6
「目的や意図に応じ、必要な内容を整理して書く」　＋ 6.6

このような項目については、本校の目指していた子供像に関わる部分であり、好結果であった。

エ　無解答率の変容

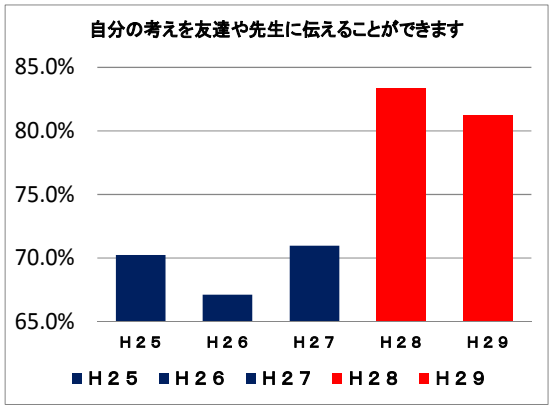
平成 27 年度の新居小学校の結果は、無答が多い傾向であったが、平成 28 年度には改善の兆しが見られ、平成 29 年度は、国語、算数ともにすべての問題で県平均を下回るようになった。問題そのものにじっくりと取り組む姿勢が身についてきている。

(2) 本校児童の学習状況について

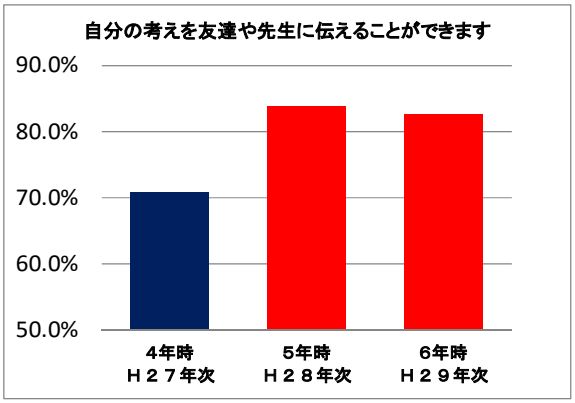
ア　児童の自己評価

４年生以上を対象に、２学期末に行っている学校評価の結果を過去５年間で比較してみると、研究を始めた平成 28 年度から「自分の考えを友達や先生に伝えることができる」と答えた児童（実数で約 100 名）が増えている。

さらに、現在６年生の自己評価を、過去３年間で経年比較すると、同項目において「そう思う」「大体そう思う」と答えた児童が増えている。

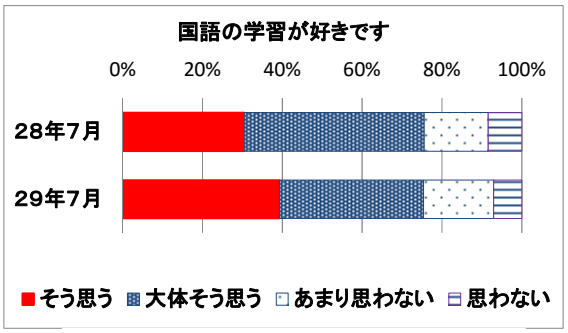


「平成 25 年度から５年間の比較」



「６年生の自己評価（経年比較）」

次に、全校児童を対象とした学習アンケート調査の結果を平成 28 年度の７月と平成 29 年度の７月とで比較すると、「国語の学習が好き」の項目で、「そう思う」「大体そう思う」と答えた児童は



「学習アンケート調査（全校児童対象）」

８割前後であるが、その中でも、「そう思う」と自信をもって答える児童が増えている。

イ　研究発表会参加者から（分科会、アンケート）

(ｱ) 子供の姿

「子供が安定しており、学ぶ意欲が高いと感じた。何をするのか分かっているので不安感がなく、お互いの意見を受け止めていた。子供にとって学ぶ必要感があり、学ぶ動機があるので、学びが繋がっていた。」等、子供の学ぶ姿勢を評価していただいた意見が多くあり、目に見える形で子供の成長を見ることができた。

(ｲ) 本研究に対して

「国語科を中心として、他教科との横断的な授業づくりということで、とても効率的に学習が進められていてよかった。もう少し早く参観できれば自校でもカリキュラムを整理して学習することができた。」という意見に代表されるように、本校の国語科を核とした教科等横断的な授業への取組が評価された。

４．今後の課題

平成 30 年も、この２年間の研究への取組を継続しつつ、学校と家庭がより一層連携を図り、児童の学力定着が確実になるようにしていきたい。そのため、以下の点について学校体制で取り組んでいく。

(1) 一層の授業改善への取組

ア　主体的な学びへ

児童の「知りたい」「調べたい」等、一人一人の「～したい」を大切にした授業を構想していく。そのために、一人一人の学びの状況把握を行うとともに、授業後の振り返りの場面をより一層重視した授業を行っていく。

イ　効果的な「対話的な学び」へ

今年度実践してきている対話的な学びについて、効果的な交流の仕方について実践を積み上げていく。特に課題となっているのは、小集団での学びから全体での交流場面であり、目的を明確にした交流活動を展開していく。

ウ　「深い学び」の姿の共通理解

どのような姿が「深い学び」となっているか、共通理解できていないため、今後はその姿を明確に押さえるよう、研修を深めていく。

エ　教科等横断的な授業

今年度取り組んでいる「国語科と他教科」との授業について、横断デザインシートを活用、作成しながら実践を積み上げていく。

(2) 家庭との連携

学校での学習の仕方が家庭へも伝わることで、より一層児童の学びが確かなものになっていく。そのため、PTA 総会をはじめ学級懇談会等、折に触れ学校での学習の様子を伝えていく。また、学校だよりや学年だよりでの掲載をはじめ、ホームページへの掲載も随時行っていく。